

大阪府堺市所在

大庭寺・伏尾遺跡

—近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書—

本文編

1998. 3

大阪府教育委員会
(財)大阪府文化財調査研究センター

大阪府堺市所在

お　　ば　　でら　　ふせ　　お

大庭寺・伏尾遺跡

—近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書—

本文編

1998. 3

大阪府教育委員会
（財）大阪府文化財調査研究センター

序 文

大庭寺遺跡、伏尾遺跡は泉州北丘陵の北端に位置し、かつて「陶邑」とよばれた須恵器生産の盛んな地域の一隅に所在します。この両遺跡を横断するように近畿自動車道松原那智勝浦線の建設が計画され、昭和62年度から平成5年度まで財大阪府埋蔵文化財協会が、また平成元年度から平成3年度と平成5年度に財大阪文化財センターが発掘調査を実施いたしました。

(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査部分については、遺物等の整理作業を終え、報告書もすでに刊行しております。大庭寺遺跡においては大量に出土した出現期の須恵器などについて、伏尾遺跡においては須恵器工人との関連が推定される古墳群について新しい知見を得て、これを広く公開することができました。

今回は、財大阪文化財センターの調査部分の遺物等の整理作業を、両財團が統合して生まれた財大阪府文化財調査研究センターが実施いたしました。1年にわたる作業で、出土した遺物の大部分の記録化を達成し、さらに大庭寺遺跡においては「密集型土坑」とよばれる古墳時代後期から奈良時代にかけての庶民の墓について、詳細に遺物を検討し、2661基にものぼる土坑の全貌を明らかにすることができました。

本書の刊行によって、近畿自動車道松原那智勝浦線建設とともに「陶邑」内の発掘調査の報告がすべて完了したこととなります。この成果によって日本に導入された時期の須恵器の様相が明らかにされ、さらに須恵器の生産を担った人々の生活の一部もうかがうことができました。

このような意義深い調査の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局、地元関係各位をはじめ調査に携わった多くの方々のご協力を得ました。ここに深く謝意を表すとともに、今後とも文化財保護政策へのご理解とご助力を賜りますようお願いいたします。

平成10年3月

大阪府教育委員会文化財保護課

課長 鹿野一美

はしがき

大庭寺遺跡および伏尾遺跡は石津川の開析した上神谷の出口付近にあたり、梅丘陵の最先端部分に位置する。この周辺は須恵器生産に携わった人々の足跡を示す遺跡の密集した地域にある。この両遺跡の発掘調査については、昭和62年度から平成5年度にわたり、当センターの前身である財大阪文化財センター、財大阪府埋蔵文化財協会によって実施された。その成果により日本列島に生産技術が導入された直後の須恵器や須恵器工人たちが葬られた古墳群をはじめとする多くの資料が発見され、須恵器生産のあり方とそれを担った人々の生活の一部をうかがうことができた。

本書は、財大阪文化財センターが調査を実施した部分の遺物等の整理報告である。ここでは、出土した遺物の大部分を資料化し、この地の歴史的変遷について整理することができた。さらに古墳時代後期から奈良時代のこの地に住んだ庶民の墓と考えられる「密集型土坑」や奈良時代の建物群などについて詳細に検討した。

前者の「密集型土坑」の資料は、当時の社会の仕組みを考える上で重要な資料となるものであり、後者の建物群については、この付近に存在したと推定される僧行基の追善供養のために創建されたと伝えられる「大庭院」や、陶邑の須恵器窯跡から出土の「大庭造国」とヘラで線刻された瓦などとの関連が注目されるところである。

本書が、陶邑の全体像の解明や日本の古代社会を復元するために広く活用されることを望むものである。

今回の整理事業に当たって賜わった、大阪府教育委員会、日本道路公団をはじめとする関係各位のご指導とご協力に深く感謝するとともに、今後とも当センターへご支援いただくよう切にお願いするものである。

平成10年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足

例　　言

1. 本書は日本道路公団の近畿自動車道松原那智勝浦線建設工事に伴う、大阪府堺市大庭寺・小代に所在する大庭寺（おばでら）遺跡、伏尾（ふせお）遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は大阪府教育委員会および財大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受け、1989年4月から1990年3月、1989年12月から1990年3月、1990年5月から1991年3月、1991年5月から1992年3月、1992年4月から1992年9月まで実施した。

調査期間中は多くの関係各位のご協力を賜わった。ここに記して感謝の意を表す。

これらの調査成果は以下の3冊の概要報告書にまとめられ刊行されている。

1989年度 『小阪遺跡（南その2）』

1990年度 『大庭寺遺跡Ⅰ』

1991年度 『大庭寺遺跡Ⅱ・伏尾遺跡Ⅰ』

3. 整理事業および本書作成は、大阪府教育委員会の指導のもと、財大阪文化財調査研究センターが1996年4月から1997年3月にかけて実施した。整理にあたり、調査部長井藤徹、南部調査事務所長藤田憲司、整理係長石神幸子のもと、整理係主査村上富喜子、整理係主任技師立花正治（写真）が担当した。

4. 現場調査は財大阪文化財センターが実施し、参事兼調整課長中西靖人、中部調査事務所長赤木克視総括のもと、下記のとおり実施した。（役職は当時のとおり）

1989年度 大庭寺1A、2A、1B	業務課長中西靖人、業務第3係長赤木克視、技師市本芳三
--------------------	----------------------------

1990年度 大庭寺3～6A、2～4B、1～3C	調査課長中西靖人、主幹兼調査第3係長赤木克視、主任技師小野久隆、技師市本芳三、技師三好孝一
--------------------------	---

1991年度 大庭寺4～8C	調査課長中西靖人、主幹兼調査第3係長赤木克視、主任技師小野久隆、技師市本芳三
----------------	--

伏尾1A、2A、B、1C、2C、 1D、2D、1E、2E	調査課長中西靖人、主幹兼調査第3係長赤木克視、主任技師小野久隆、技師市本芳三、技師三好孝一
---------------------------------	---

1992年度 伏尾3C	調査課長中西靖人、主幹兼調査第3係長赤木克視、主任技師小野久隆
-------------	---------------------------------

5. 調査にあたり、以下の自然科学分野の分析を実施した。

1989年度 須恵器窯跡（TG228、229）の熱残留磁気分析	前中一明（花園大学）
---------------------------------	------------

花粉・珪藻・プラントオパール分析	株パリノ・サーヴェイ
------------------	------------

出土土器の胎土分析、鉱滓の鉱物分析	株第四紀地質研究所
-------------------	-----------

1990年度 残存脂肪酸分析	株ズコーシャ総合科学研究所
----------------	---------------

花粉・珪藻・プラントオパール分析	株川崎地質 渡邊正巳
------------------	------------

赤色顔料	財大阪文化財センター（当時）
------	----------------

6. 発掘調査の実施にあたって日本道路公団大阪工事事務所の協力を受けるとともに、大阪府教育委員会、堺市教育委員会をはじめとする関係各機関ならびに下記の方々の御指導・御教示を賜わった。

また、作業の過程で多くの諸氏および諸機関に御指導・御教示を賜わった。記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）。

小林義孝・福田英人・森屋直樹・宮崎泰史・渡辺昌宏・玉井 功・松村隆文・奥 和之・堀江門也（大阪府教育委員会）、土井和幸・富加見泰彦（和歌山県教育委員会）、近藤隆司・白神典之・樋口吉文・森村健一・石田 修・鹿野吉則・續伸一郎・藤井克己（堺市教育委員会）、乾 哲也・白石耕治（和泉市遺跡調査会）、芝田和也（松原市教育委員会）、桜井久之・田中清美（大阪市文化財協会）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、天野末喜（藤井寺市教育委員会）、福永伸哉（大阪大学）、中野益男（帝広畜産大学）、原口正三（甲子園女子短期大学）、植野浩三・木下密運・西山要一（奈良大学）、前中一明（花園大学）、根鈴輝雄（倉吉市教育委員会）、井上和人（文化庁）、藤澤一夫（四天王寺国際仏教大学）

7. 本報告書を作成するにあたり、以下の補佐員・補助員の参加およびご協力を得た。（五十音順）

秋好洋子、今橋朱美、上松敏子、植村弘子、内山信子、瓜崎恵美子、緒方優子、沖野節子、乙女さおり、小原睦子、加茂千歳、加茂幸彦、久禮孝志、小門邦代、後藤佳代、坂本けい子、追田信子、高山明子、滝野百合子、龍田かほる、立石京子、田中君子、陳映芳、徳田栄子、中山武代、納谷好子、西川アサエ、西口桂子、西田久美、二宮サキ子、東野穂澄、樋口順子、牧明美、松井晴美、松村より子、松本昭子、三島けい子、三野知子、三山法子、八木孝子、山尾温子、山本晶子、横谷安也子、若井キヨ子

8. 本調査に関わる遺物、写真、スライド、実測図などは（財）大阪府文化財調査研究センターにて保管しており、広く活用されることを希望する。

凡 例

- 遺跡の略称は、大庭寺遺跡がOBD、伏尾遺跡がFSOであり、遺物の注記には遺跡略称を用いた。
- 本書は既に刊行されている大庭寺・伏尾遺跡の概要報告書をもとに、今回遺物整理した結果を加えたものである。
- 本書で用いた方位北は座標北を示し、標高はT.P.（東京湾平均潮位）土を用いた。なお、遺構平面図のX=166700、Y=47100の座標の表示はX=-166km700m、Y=-47km100m、遺構断面図の36.0mはT.P.+36.0mのことであり、便宜上単位などを省いた。
- 遺構の平面実測は株関西航測および㈱宇都エンジニアリングに委託し、航空写真測量による1/20、1/100などの図化を行い、現地では必要に応じて詳細な遺物出土状況、断面図などを作成した。
- 土層の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』第8版（農林水産省農林技術会議事務局監修・㈲日本色彩研究所色票監修1988）を援用した。
- 本書の記述は時代順とし、須恵器の記述には中村浩氏の編年を用いた。また、大庭寺遺跡では古墳時代と飛鳥～奈良時代という表現を用いたが、杯蓋のかえりがつくⅢ型式1段階からⅣ型式までのものを飛鳥～奈良時代とした。
- 遺物実測図の縮尺は石器が2/3、土器が1/4、埴輪が1/6であるが、一部異なる縮尺を用いているものもあり、それらは実測図にスケールを表示している。遺物実測図の左下にトレンチ名、遺構名（例：2B 土坑1）を記した。
- 本文は、今回の遺物整理の結果に基づく事柄などを除いて、既に刊行されている2冊の概要報告書をまとめて転載した。そのため、第3章第9節のまとめにおいて、密集型土坑群の見解が調査担当者により異なっているが、それをそのまま記載している。

各章、節の本文執筆は、以下の通りである。

第1章第1節	赤木克視
第1章第2節、第2章	小野久隆
第3章第1節・第8節3	市本芳三
第3章第2節、第4章第2節2・第3節1・第6節	小野、村上富喜子
第3章第3節・第8節2・第9節、第4章第3節2・第5節	小野、市本、村上
第3章第4～7節	市本、村上
第3章第8節1、第4章第2節1	村上
第4章第1節	小野、市本、三好孝一
第4章第2節3・第4章第4節	小野、市本、三好、村上

- 引用参考文献は各章の末尾に、科学的な分析の引用参考文献は各節の末尾に記した。
- 本書の編集は村上が行った。

目 次

序 文

はしがき

例 言

凡 例

第1章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経緯	1
---------------	---

第2節 発掘調査の方法	3
-------------	---

第2章 位置と環境

第1節 位置	5
--------	---

1. 地形的環境	5
----------	---

第2節 歴史的環境	5
-----------	---

1. 旧石器時代	5
----------	---

3. 弥生時代	6
---------	---

5. 歴史時代	10
---------	----

第3章 大庭寺遺跡の遺構および遺物

第1節 基本層序と遺構の概要	12
----------------	----

第2節 弥生時代以前	13
------------	----

1. 落ち込み	13
---------	----

2. 包含層、その他出土遺物	18
----------------	----

第3節 古墳時代	23
----------	----

1. 建物	23
-------	----

2. 井戸	28
-------	----

3. 溝	31
------	----

4. 土坑	45
-------	----

5. 窯	62
------	----

6. 落ち込み	62
---------	----

7. 包含層、その他出土遺物	67
----------------	----

第4節 飛鳥～奈良時代	76
-------------	----

1. 建物・権・道路状遺構・Pit	76
-------------------	----

2. 井戸	90
-------	----

3. 溝	91
------	----

4. 土坑	108
-------	-----

5. 密集型土坑群	108
-----------	-----

6. 窯	149
------	-----

7. 河川	161
-------	-----

8. 落ち込み	164
---------	-----

9. 包含層、その他出土遺物	165
----------------	-----

第5節 平安時代	176
----------	-----

1. 建物・権	176
---------	-----

2. 包含層、その他出土遺物	180
----------------	-----

第6節 中世	180
--------	-----

1. 包含層、その他出土遺物	181
----------------	-----

第7節 近世	182
--------	-----

1. 溝	182
------	-----

2. 井戸	182
-------	-----

3. 土坑・Pit	185	4. 池	185
5. 包含層、その他出土遺物	190		
第8節 遺構・遺物の検討	190		
1. 出土須恵器の ヘラ記号について	190	2. 密集型土坑群について	191
		3. 奈良時代建物群について	197
第9節 まとめ	201		
1. 繩紋時代	202	2. 弥生時代	202
3. 古墳時代～飛鳥時代	202	4-1・2. 古墳時代～奈良時代	203
5. 奈良時代	207	6. 平安時代	207
7. 中・近世	208		
第4章 伏尾遺跡の遺構および遺物			
第1節 遺構および遺物の概要と基本層序	275		
1. A地区	275	2. B地区	278
3. C地区	278	4. D地区	281
5. E地区	282		
第2節 弥生時代以前	285		
1. 旧石器～弥生時代の石器	285	2. 繩紋時代遺構および遺物	286
3. 弥生時代遺構および遺物	286		
第3節 古墳時代	298		
1. A～C地区的遺構 および出土遺物	298	2. D地区的遺構および出土遺物	306
第4節 中世	327		
1. 遺構および出土遺物	327		
第5節 近世	336		
1. 遺構および出土遺物	336		
第6節 まとめ	337		
1. 旧石器時代	338	2. 繩紋時代	339
3. 弥生時代	339	4. 古墳時代～古代	340
5. 中世・近世	344		
付章 科学的分析			
第1節 大庭寺遺跡採取土壤のプラント・オパール分析報告	347		
第2節 大庭寺遺跡採取土壤の花粉分析及びプラント・オパール分析	355		
第3節 伏尾遺跡採取土壤の花粉分析・珪藻分析及びプラント・オパール分析（1）	367		
第4節 伏尾遺跡採取土壤の花粉分析及びプラント・オパール分析（2）	388		
第5節 大庭寺遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析	407		
第6節 伏尾遺跡出土赤色顔料の分析	422		

挿 図 目 次

図1 地区割図	4	図33 土坑177平面図および3A,5A,2A,2Bトレンチ	
図2 大庭寺遺跡調査区内座標	4	土坑出土遺物	49
図3 大庭寺遺跡トレンチ配置図	4	図34 土坑97平面図および出土遺物	50
図4 大庭寺・伏尾遺跡周辺地形図	7	図35 土坑105平・断面図および2Bトレンチ	
図5 周辺の遺跡	9	土坑出土遺物	51
図6 落ち込み42平・断面図および出土石器	14	図36 土坑6,18平面図および1B,2Bトレンチ	
図7 落ち込み42出土石器	15	土坑出土遺物	53
図8 落ち込み42出土石器	16	図37 土坑61,8平面図および出土遺物	55
図9 落ち込み42出土石器	17	図38 1B,3Bトレンチ土坑出土遺物	57
図10 サスカイト地区別出土点数	19	図39 土坑610平・断面図および3B,4Bトレンチ	
図11 包含層他出土石器	20	土坑出土遺物	59
図12 包含層他出土石器	21	図40 土坑611平・断面図、土坑612遺物分布図	
図13 包含層他出土石器および弥生土器	22	および出土遺物	60
図14 6Aトレンチ遺構図	24	図41 土坑612平・断面図および出土遺物	61
図15 6AトレンチA～G地点土層断面(柱状図)	24	図42 TG229平・断面図	63
図16 6Aトレンチ断ち割りトレンチ1土層断面	25	図43 TG229出土遺物	64
図17 6Aトレンチ断ち割りトレンチ4土層断面	25	図44 TG229出土遺物	65
図18 6Aトレンチ断ち割りトレンチ3土層断面	25	図45 落ち込み58平面図および落ち込み6,9,58	
図19 6Aトレンチ断ち割りトレンチ2土層断面	25	出土遺物	66
図20 A・B地区 古墳時代遺構図	26	図46 落ち込み3,10平面図および	
図21 建物12,13,32,45平・断面図		落ち込み3,4,5,10,22,23出土遺物	68
およびPit出土遺物	27	図47 龍馬文地区別出土点数	69
図22 井戸22平・断面図および出土遺物	29	図48 包含層出土遺物	70
図23 井戸22・23土層断面図	30	図49 包含層出土遺物	71
図24 井戸23平面図および出土遺物	30	図50 包含層出土遺物	72
図25 溝31平・断面図および3A,2A,1Bトレンチ		図51 包含層出土遺物	73
溝出土遺物	32	図52 包含層出土遺物	74
図26 溝29出土遺物	33	図53 包含層、その他出土遺物	75
図27 1Bトレンチ溝出土遺物	36	図54 奈良時代建物群	77
図28 溝19平面図および出土遺物	37～38	図55 建物10,37,建物37(Pit2603)平・断面図	
図29 2Bトレンチ溝平面図および出土遺物	41～42	および出土遺物	78
図30 2B,1B,3Bトレンチ溝出土遺物	43	図56 建物・道路状遺構平面図、建物9,21,27	
図31 3B,4Cトレンチ溝出土遺物	44	平・断面図および出土遺物	79
図32 土坑81平面図および3Aトレンチ		図57 建物24,28,建物28(Pit1201)平・断面図	
土坑出土遺物	46	および出土遺物	81

図58 建物5,19,29,建物29(Pit1205)、柵7 平・断面図および出土遺物	82	図87 5C トレンチ土坑平・断面図	130
図59 建物5,6,7,8,40平・断面図	84	図88 7C,8C,5C トレンチ土坑出土遺物	131
図60 建物23,31,34,38,建物34 (Pit2153) 平・断面図	85	図89 土坑1000,1002,991,1255,1253,1249平・断面図 および5C,3C トレンチ土坑出土遺物	133
図61 建物26,35,39,柵2平・断面図	86	図90 土坑2120,1565,1614,1632,1347平・断面図および 3C,1C トレンチ土坑出土遺物	134
図62 建物11,15,33,36,43 平・断面図および出土遺物	87	図91 土坑307,343平・断面図および1C トレンチ土坑 出土遺物	137
図63 建物14,41, Pit2571 平・断面図および出土遺物	88	図92 土坑401,321,310,315,313,342,526,268平・断面図 および1C トレンチ土坑出土遺物	138
図64 井戸21平・断面図および出土遺物	92	図93 5C トレンチ方形土坑群	139
図65 溝57平・断面図および出土遺物	93~94	図94 5C トレンチ土坑平・断面図	140
図66 溝57出土遺物	95	図95 5C トレンチ脂肪酸分析土坑平・断面図	141
図67 溝57出土遺物	96	図96 5C トレンチ脂肪酸分析土坑平・断面図	142
図68 溝57出土遺物	97	図97 1C・2C・3C トレンチ土坑平・断面図	143
図69 溝57出土遺物	98	図98 3C・5C トレンチ土坑平・断面図	144
図70 溝57出土遺物	99	図99 5C・8C トレンチ土坑平・断面図	145
図71 溝57出土遺物	100	図100 1C・3C トレンチ土坑断面図	146
図72 溝57出土遺物	101	図101 1C トレンチ土坑断面図	147
図73 溝57出土遺物	102	図102 1C トレンチ土坑断面図	148
図74 溝56,87,88,90,85出土遺物	104	図103 1C・2C トレンチ土坑断面図	149
図75 溝1平・断面図および溝14,1出土遺物	105	図104 TG228,229位置図およびTG228平面図	151
図76 溝1出土遺物	106	図105 TG228断面図	153~154
図77 溝1,96,100,122,176出土遺物	107	図106 TG228出土遺物	156
図78 土坑164平面図および3A,4A,2B トレンチ 土坑出土遺物	108	図107 TG228出土遺物	157
図79 7C,5C トレンチ土坑平・断面図	111	図108 TG228出土遺物	158
図80 5C トレンチ土坑平・断面図	115	図109 TG228出土遺物	159
図81 7C,5C トレンチ土坑出土遺物	117	図110 TG228出土遺物	160
図82 土坑1090,1118,1121,1238,1239,2300平面図 および5C,3C トレンチ土坑出土遺物	119	図111 河川1遺物出土状況および出土遺物	162
図83 土坑1582,1379平面図、土坑1402断面図 および3C トレンチ土坑出土遺物	120	図112 河川1出土遺物	163
図84 土坑1586,1636,1497,1649平・断面図 および3C トレンチ土坑出土遺物	123	図113 落ち込み44,55、包含層出土遺物	165
図85 土坑2102,331,289,557平・断面図 および3C,1C,2C トレンチ土坑出土遺物	124	図114 包含層出土遺物	166
図86 7C,8C,5C トレンチ土坑平・断面図	129	図115 包含層出土遺物	168
		図116 包含層出土遺物	170
		図117 包含層出土遺物	172
		図118 包含層、その他出土遺物	174
		図119 包含層	175
		図120 平安時代建物群	177

図121 建物1,2,3,4,16,17平・断面図	および建物16(Pit955)出土遺物	178	図156 2C トレンチ第8面溝19断面図	および出土遺物	292
図122 建物18,20,30、柵1,3,4,5,6			図157 2C トレンチ第8面畦畔5断面図	および第8面出土遺物	292
	平・断面図	179			
図123 Pit1205、包含層出土遺物		181	図158 2C トレンチ第7面平面図		
図124 土坑76、包含層出土遺物		181		および溝15出土遺物	292
図125 溝出土遺物		183	図159 2C トレンチ第7面杭列断面図		294
図126 井戸出土遺物		186	図160 2C トレンチ出土遺物		294
図127 井戸出土遺物		187	図161 3C トレンチ出土遺物		294
図128 井戸出土遺物		188	図162 D トレンチ落ち込み8遺物出土状況図		
図129 3A トレンチ近世土坑群平面図		188		および出土遺物	294
図130 土坑2602平・断面図およびPit、 土坑出土遺物		188	図163 D トレンチPit9平・断面図		
図131 松池堤防2土層断面		189		およびPit9他出土遺物	297
図132 池および包含層出土遺物		189	図164 D トレンチ溝7断面図および出土遺物		297
図133 ヘラ記号各種グラフ		192	図165 1E・2E トレンチ第3面平面図		297
図134 時期別遺物出土土坑分布図		193~194	図166 1E トレンチ第3面Pit3平・断面図		
図135 土坑面積グラフ		196		および出土遺物	297
図136 建物群の構成		199	図167 1A・2A トレンチ河川1・2・3と流路平面図		
図137 センターと協会の奈良時代建物群配置図		200		および出土遺物	299
図138 陶邑古窯址群分布図		205	図168 2C トレンチ第6面平面図および出土遺物		299
図139 伏尾遺跡トレンチ配置図		276	図169 2C トレンチ第5面平面図		299
図140 1A・2A トレンチ層序概略図		277	図170 2C トレンチ第5面断面図		299
図141 1C・2C トレンチ層序概略図(北東壁面)		281	図171 2C トレンチ第5面畦畔2付近の杭列 平・断面図		301
図142 1C トレンチ土層断面(南東壁)		282	図172 2C トレンチ第5面畦畔1断面図		301
図143 2C トレンチ土層断面(南壁面)		282	図173 2C トレンチ第5面畦畔2断面図		301
図144 河川4、包含層出土石器		283	図174 2C トレンチ第5面土坑1断面図		301
図145 包含層他出土石器		284	図175 2C トレンチ第5面出土遺物		301
図146 1A・2A トレンチ河川4・5・6平面図		287	図176 2C トレンチ第4面平面図		305
図147 包含層他出土繩紋土器		287	図177 2C トレンチ第4面出土遺物		305
図148 1C トレンチ第2面平面図		287	図178 1C・2C トレンチ出土遺物		305
図149 土器集積1分布		287	図179 2C トレンチ第3面平面図		305
図150 土器集積2分布		287	図180 3C トレンチ出土遺物		305
図151 土器集積、包含層出土弥生土器		287	図181 D トレンチ遺構全体図		307~308
図152 1C トレンチ流路1、包含層出土弥生土器		291	図182 D トレンチPit8平・断面図		310
図153 2C トレンチ第9面平面図および出土遺物		291	図183 D トレンチ落ち込み5平・断面図		
図154 2C トレンチ第8面平面図		291		および出土遺物	310
図155 2C トレンチ第8面杭列断面図(杭42~54)		291	図184 D トレンチ3号墳・その他の遺構平面図		

および3号墳出土遺物	310	図198 2C トレンチ第2面平面図	328
図185 D トレンチ土壤墓（土坑18）平・断面図		図199 D トレンチ古墳時代以降の遺構	328
および出土遺物	312	図200 D トレンチ溝3断面図および出土遺物、	
図186 D トレンチ土坑12直上層他出土遺物	314	Pit7出土遺物	331
図187 D トレンチ1号墳主体部（土坑19）位置図	314	図201 D トレンチ溝6断面図（上：土器群付近、	
図188 D トレンチ1号墳主体部（土坑19）		下：北西側）および出土遺物	331
平・断面図および出土遺物	314	図202 D トレンチ包含層出土遺物	331
図189 D トレンチ2号墳断面図	316	図203 1E・2E トレンチ第1・2面平面図	333
図190 D トレンチ2号墳埴輪出土状況	317～318	図204 1E トレンチ第1面溝断面図	333
図191 D トレンチ2号墳埴輪列出土状況	320	図205 1E トレンチ第1面溝出土遺物	333
図192 D トレンチ2号墳埴輪列掘り方	321	図206 1E トレンチ第1面溝出土遺物	334
図193 D トレンチ2号墳埴輪列立面図	322	図207 1C トレンチ第1面平面図	336
図194 D トレンチ2号墳埴輪23断面	323	図208 2C トレンチ第1面平面図	336
図195 D トレンチ2号墳出土埴輪	323	図209 D トレンチ溝5、包含層出土遺物	336
図196 D トレンチ2号墳出土埴輪	324	図210 伏尾遺跡古墳群概略図	342
図197 3C トレンチ出土遺物	328		

表 目 次

表1 大庭寺遺跡石器一覧表	19	表7 大庭寺遺跡土坑面積基數表（A・B地区）	195
表2 古墳時代建物一覧表	28	表8 大庭寺遺跡土坑面積基數表（C地区）	196
表3 奈良時代建物（1・2）	89・90	表9 大庭寺遺跡土坑一覧（1～10）	210～219
表4 奈良時代柵一覧表	90	表10 大庭寺遺跡密集型土坑群一覧（1～55）	220～274
表5 平安時代建物一覧表	180	表11 伏尾遺跡石器一覧表	285
表6 平安時代柵一覧表	180	表12 墳輪観察表（1・2）	325・326

付 図 目 次

付図1 大庭寺遺跡構全体図・北壁層序	付図5 大庭寺遺跡4Bトレンチ遺構図
付図2 大庭寺遺跡6A・2A・3Aトレンチ遺構図	付図6 大庭寺遺跡3C,5C,7C,8Cトレンチ遺構図
付図3 大庭寺遺跡1A～5Aトレンチ遺構図	付図7 大庭寺遺跡1C,2Cトレンチ遺構図
付図4 大庭寺遺跡1B～3Bトレンチ遺構図	付図8 大庭寺遺跡土坑出土遺物接合関係図

付章挿図目次

第1節	図1	3Bトレンチ北壁断面（深掘り断面）および試料採取位置（2地点）	348
	図2	4Bトレンチ西壁断面（河道断面）および試料採取位置（3地点）	348
	図3	3地点の主要珪藻化石の層位分布	351
	図4	3地点の花粉化石群集の層位分布	352
第2節	図1-1	発掘地点位置図	355
	図2-1	試料採取地点図	356
	図2-2	試料採取状況	357
	図2-3	試料採取位置	357
	図3-1	プラント・オパール分析処理フロー	358
	図3-2	花粉分析処理フロー	360
	図4-1	プラント・オパールダイアグラム（1）	361
	図4-2	プラント・オパールダイアグラム（2）	362
	図4-3	花粉ダイアグラム	363
第3節	図1-1	発掘地点位置図	367
	図2-1	試料採取地点図	368
	図2-2	試料採取状況	368
	図2-3	試料採取位置	369
	図3-1	花粉分析処理フロー	372
	図3-2	プラント・オパール分析処理フロー	373
	図4-1	イネ科花粉の粒径分布	375
	図4-2	花粉ダイアグラム	376
	図4-3	珪藻ダイアグラム	378
	図4-4	珪藻総合ダイアグラム	379
	図5-1	伏尾一大庭寺地区大阪層群分布深度	382
	図5-2	既存花粉分析試料（1）	383
	図5-3	既存花粉分析試料（2）	386
第4節	図1-1	調査地点	388
	図2-1	試料採取地点	389
	図2-2	No.1地点試料採取位置	389
	図2-3	No.2地点上部試料採取位置	390
	図2-4	No.2地点下部試料採取位置	390
	図4-1	イネ科花粉の粒径分布	393

図4-2	No.1地点の花粉ダイアグラム	394
図4-3	No.2地点の花粉ダイアグラム	395
図4-4	No.1地点のプラント・オパールダイアグラム	397
図4-5	No.2地点のプラント・オパールダイアグラム	397
図4-6	第3黒色帶平面採取のプラント・オパールダイアグラム	397
図5-1	既存データ(花粉ダイアグラム)	400
図5-2	大阪市天保山での花粉分析結果	404
図5-3	関西国際空港での花粉分析結果	405
第5節	図1 上坑配置状況および土坑外対照試料採取地点	415
	図2 各土坑内の土壤試料採取地点	416
図3-1	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	417
図3-2	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	418
図4	試料中に残存する脂肪のステロール組成	419
図5	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	420
図6	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	421
第6節	図1 X線回折分析結果図	422

付 章 表 目 次

第1節	表1 珪藻の生態分類	349
	表2 淡水生種の各生態性に対する適応性	349
	表3 各地点の植物珪酸体分析結果	353
第2節	表1-1 分析処理・検出数・計画数数量表	356
第3節	表1-1 分析処理・検出数・計画数数量表	368
	表4-1 検出プラント・オパール化石数量表	380
第4節	表1-1 分析処理・検出数・計画数数量表	389
	表4-1 検出された花粉化石の種類一覧表	392
	表5-1 既存データとの対比	399
第5節	表1 土壤試料の残存脂肪抽出量	413
	表2 試料中に分布するコレステロールとシットステロールの割合	414

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

大庭寺遺跡は大阪府堺市大庭寺・小代に、伏尾遺跡は堺市伏尾・小代・平井に所在する。

調査は日本道路公団（以下公団と略す）の、近畿自動車道松原那智勝浦線（現・阪和道）建設に先立ち実施したものである。この高速道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、大阪府教育委員会の指導の下、南河内郡美原町の府道中央環状線の美原ロータリーから堺市小阪までの府道松原泉大津線との併設区間を、（財）大阪文化財センター（以下センターと略す）が担当する予定であった。また、近畿自動車道の単独区間である堺市伏尾以南を、（財）大阪府埋蔵文化財協会（以下協会と略す）が担当する予定であった。しかし、両財團の担当地域ともに環境問題や用地買収の難航などで調査できない区間が多く、調査工程が大幅に遅れてしまった。そのため、当初の人員配置計画が乱れてしまい、担当予定者を忙しい他の調査へ回すケースが続出した。このことから、当該遺跡が調査可能になった時点で、調査を担当する人員が確保できない事態も生じた。

そうした場合、通常は調査担当者が確保できるまで調査を遅延せざるを得ない。しかし、計画の遅れは道路建設主体者側も同様であり、道路供用開始時期の切迫から調査の早期着手の手立てを大阪府教育委員会に求めた。そこで、大阪府教育委員会は、一方の財團に調査担当者の余裕がある場合や着手優先順位の変更が可能であれば、地域割を超えて一方の財團に調査を委ねる方針を打ち出した。堺市平井遺跡の場合は当センター担当区域であったが、協会が全域を調査することになった。逆に、伏尾遺跡と大庭寺遺跡は協会の担当地域であったが、それらの一部を当センターが調査することになった。これは、1989年度末段階では当センターの本来の担当地域である併設区間の調査が、用地問題未解決な残部分を残すのみとなっており、調査体制にいさか余裕が生じたためである。このため、大庭寺遺跡および伏尾遺跡の調査は本来、協会の担当であったが、先に述べた事情により、両財團が分担して受け持つこととなった。

大庭寺遺跡は、「陶邑」の地区区分では梅地区に属し、中位段丘面からその東側段丘崖、石津川左岸の谷底平野部に広がる遺跡である。調査は協会によって1986年度に試掘が行われ、1987年度より遺跡東半部から本調査が実施されたが、調査可能になった部分から順次着手するという細切れ調査を強いられていた。1989年度に入ると、公団側から大阪府教育委員会に対して道路供用時期の切迫から調査の進捗を要請されたため、未調査で残されていた泉北北線の大庭寺交差点からコウロギ橋までの間450mをセンターが担当することになった。1989年度は調査面積が3000m²であったため小阪遺跡（南その2）の調査に含めて実施した。1990年度に残りの約20,000m²をすべて調査する予定であったが、西端部の約2,000m²は用地問題が未解決で、翌1991年度に繰り延べた。

伏尾遺跡は、「陶邑」での高藏寺地区に属し、高位段丘面から西側段丘崖、石津川右岸の谷底平野に広がる遺跡である。調査は協会が1987年度に試掘、1988年度に北半部から本調査に着手していた。ところが、遺跡中央の大きな開析谷（待池谷）部分とその南側段丘崖西斜面は、厚い産業廃棄物で覆われており、この土地の返還を巡って土地所有者と産業廃棄物業者との間で長らく係争し、みかん畑部分も含めて用地問題解決のめどが立たなかった。そこで、この場所が堺南インターチェンジ設置場所で、供用

時期の関係から公団としても早急に発掘調査を済ませておきたい意向が強く、待池谷以南の伏尾遺跡南半部については、1990年度にセンターが調査担当することとなった。調査方法は、地表面が露出しているみかん畑部分（D地区）は全面調査する。しかし、その他の部分は、橋脚建設などで破壊される部分（E地区）と、高速道路本線を潜る道路の構造物（以下ボックスと略す）のできる部分（A～C地区）のみを対象とすることになった。これは、高速道路本線の大半が盛土区間であり、しかもその下には厚い産業廃棄物が存在して遺構面が破壊される恐れがないこと、また、全面調査をしようとしても、膨大な産業廃棄物を再度どこかへ運ばねばならず、受入れ先、除去期間、費用等を考慮すれば現実的には不可能に近いことを考慮したものである。

1990年度は、丘陵下の府道界かつらぎ線（泉北2号線）と石津川を跨ぐ橋脚部分の調査（E地区）と、ボックス部のB地区（待池谷北側斜面部）の試掘を実施した。

E地区は伏尾遺跡の南西部に位置し、東側には調査区からの比高約25mを測る伏尾丘陵が接し、西側には石津川を界して、その対岸に大庭寺遺跡を望む場所に立地している。調査区は道路予定地内の橋脚建設予定地3ヶ所を対象としたが、その西半分が昭和40年代に行われた石津川改修工事以前の旧流路部分に相当すると予測されること、また、調査区を含めた道路予定部分一帯には、厚さ20mに及ぶコンクリート、廃油、廃材などの産業廃棄物が不法投棄され、これらが地下深くまでその影響を及ぼしていることが予測されたため、調査にさきがけて包含層・遺構の残存の有無と、その状態を知るために機械による掘削を行った。その結果、旧流路の位置を確認すると共に、一部攪乱を被った部分はあるものの、遺構面への影響は比較的軽微であること、遺物を多量に含む土層が堆積していることが明らかとなった。

以上のような状況に基づいて関係各機関との調整を計った結果、埋蔵文化財の取扱いに関しては、本体工事の進捗状況に合わせ、発掘調査を実施することが急速決定された。

B地区については、試掘の結果産業廃棄物投棄時に完全に破壊されていることが判明し、本調査を断念している。

1991年度は用地問題の解決を待って、残りのみかん畑（D地区）とボックス部のA・C地区を完掘する予定であった。ところが、ここでも用地問題の解決が年度半ばにずれ込んだのを始めとして、多くの障害が生じ、調査が大幅に遅れた。

D地区は、盛土がないため調査そのものには支障がなかったが、地主との用地買収の際の条件整備に手間取り、着手が12月にずれ込んだ。用地問題のない段丘崖下の谷底平野部に位置するA地区は、産業廃棄物の盛上据部のためその除去量も少なく、すでに着手できるはずであった。ところが、1990年度内に完了しているはずの産業廃棄物の除去が、運び先の都合により遅れたことと、鋼矢板打設もあって掘削開始が6月下旬になった。

待池谷の谷底部に位置するC地区は、厚さ17mほどの産業廃棄物の除去に時間がかかったために着手が11月になった。また、このC地区は、ボックス建設の関係から調査区を3分割せざるをえず、より手間がかかるってしまった。なお、このC地区では、西端部の3Cトレンチが暫定供用されていた堺南インターチェンジの道路切り替え後でないと着手できないという制約があり、1991年度中には着手が不可能となったため、翌1992年度に調査を繰り延べ終了した。

以上のような経過から、今回の伏尾遺跡と大庭寺遺跡の調査は、予期したこととはいえ様々な障害があつて非常な苦戦を強いられた。しかし、ともかくも当センターが1973年の第1次調査以来取り組んできた近畿自動車道関連の発掘調査も無事終了することができた。この間、多くの関係各位にご協力を賜っ

た。末尾ながら記して感謝の意を表する。

第2節 発掘調査の方法

大庭寺遺跡の調査地区（トレンチ）設定は、現在の水路・里道で区分し、大きくA・B・Cの3地区に分けた。それぞれを更に、図3のように分割した。

伏尾遺跡は、小代の丘陵上をD地区、北側の丘陵裾をC地区、近畿自動車道堺南インターチェンジ出口の所をA地区、多聞寺の西側、泉北2号線のすぐ東側をE地区とした。D地区は更に1Dと2Dに分割し、C地区も1C・2C・3Cの3地区に分けて調査を行った。A地区は、協会担当の調査区の南東側に接して位置し、1A・2Aに分割した（図139）。E地区は2度にわたる産業廃棄物の除去作業に合わせ、1E・2Eに分けた。

調査は現耕作土、盛土をバックホーによる機械掘削で除去し、その後は人力によって掘削、調査を行った。なおA地区は鋼矢板を打設し、安全を期して調査を行った。

地区割については、当センターの統一基準に従って国土座標の平面直角座標系（17座標系）を使用し、遺構・遺物の出土状況の実測を行い、また遺物の取り上げも行った。地区割の基準線は、東経136°0'、北緯36°0'を原点とする国土座標軸（第VI座標系）を使用し、区割は大から小へ6段階で、大阪府全域を網羅する（図1）。

第I区画：1万分の1の地形図の地区割図をそのまま使用する。南西端を基点に、縦軸を南から北へA～O、横軸を西から東へ0～8で表示する。1区画は東西8km、南北6kmとなる。

第II区画：2,500分の1の地形図の地区割をそのまま使用する。第I区画を南北、東西に各々4分割計16区画を設定する。1区画は南北1.5km、東西2kmとなる。区割は南西端を基点にして1とし、北東端を16とする平行式の地区名を表示する。

第III区画：第II区画を100m単位で南北15、東西20に区画し、第II区画とは反対に北東端を基点にして、南北A～O、東西1～20に分割表示する。大区画と称する。

第IV区画：第III区画内を10m単位で、南北、東西各々10区画に分割する。北東端を基点にして南北a～j、東西1～10に分割表示し、小区画と称する。

更に精度が必要とされる場合は、第IV区画内を5m単位で区画し、第V区画とする。また第V区画は、第VI区画に細分され、調査状況に応じて使用しているが、また国土座標の数字をも並記し、出土した地点を明確にしておく場合もある。

土層観察用アゼは、基本的に先述した区画10m、5mの単位で国土座標X軸とY軸にのるようにして設定するが、遺跡の内容、立地や地形的状況、更に遺構の状況に応じて臨機応変に対応している。伏尾遺跡の場合、丘陵上のD地区は国土座標にのる様に設定し、丘陵下のC・A・E地区は地表下を掘削する為に、四周に壁を残して土層断面図を作成することを基本とし、更に必要とする場合は、随時アゼを設定した。遺構の場合も同様にして行った。

測量は航空測量、パルーンによる写真測量を行った。特に大庭寺遺跡においては、周辺住民に配慮してパルーンによる測量も行った。また並行して平板測量や、遺り方測量も行った。全体の遺構平面図は、1:20、1:100、1:200の縮尺で作図し、個々の遺構平面図や断面図は1:5、1:10、1:20の縮尺で行った。

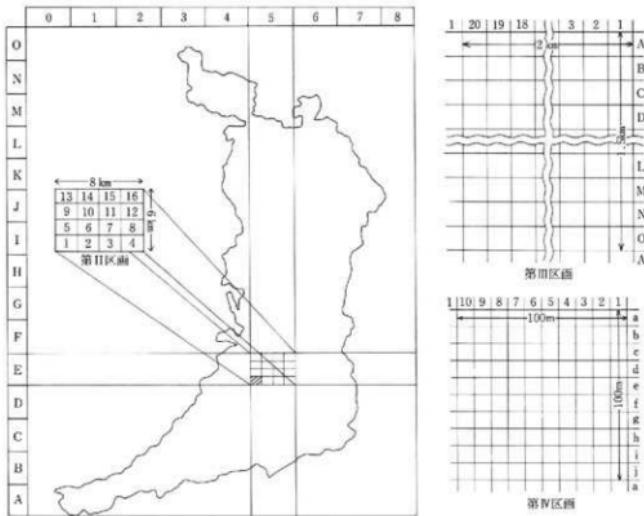


図1 地区割図

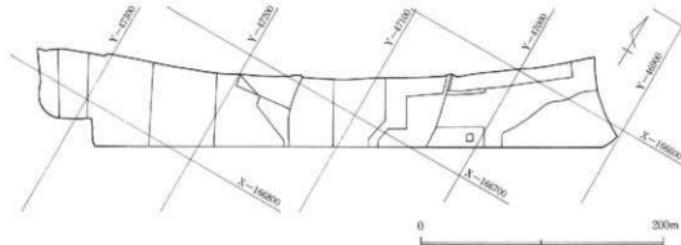


図2 大庭寺遺跡調査区内座標



図3 大庭寺遺跡トレンチ配置図

第2章 位置と環境

第1節 位置

1. 地形の環境

大庭寺遺跡は、大阪府堺市大庭寺と小代に所在する遺跡である。その範囲は『大阪府文化財分布図』（大阪府教育委員会 1991年）によれば、石津川・泉北2号線の西側の小代集落から、大庭寺集落を含む泉北北線の北側の範囲で、およそ4.2km²を測る。遺跡は協会と二分して調査を行い、2号線から濃登池と大庭寺交差点までを協会の調査分とし、当センターは、大庭寺交差点から福泉の堺市立埋蔵文化財センターの東側までを行った。

伏尾遺跡は、堺市伏尾と平井、小代、和田に所在する。遺跡の範囲は分布図によれば、平井の下池・上池より以南、石津川に架かる新川橋までの範囲で約1.6km²である。本遺跡も大庭寺遺跡と同様に、協会と分けて調査を行った。当センターは石津川左岸小代地区の丘陵と、丘陵裾部分の調査を行った。

大庭寺遺跡・伏尾遺跡とともに、泉北丘陵から派生する段丘上に位置している。泉北丘陵の河川としては石津川と和田川の2河川と陶器川等の小河川が存在している。これらの河川に挟まれるようにして小規模な丘陵、解析谷、谷底平野がよく発達している。また、この地域は溜め池が多く存在するが、中世以降に開析谷を堰き止めて築造されたと推測される。

大庭寺遺跡は、梅丘陵から派生する石津川左岸の中位段丘上に立地しており、また伏尾遺跡は石津川の右岸の泉ヶ丘丘陵から派生する高位段丘から低位段丘、氾濫原、開析谷に立地している。伏尾遺跡の丘陵上に立てば、西は信太山丘陵、東は生駒山・二上山と葛城山、北は百舌鳥古墳群、南は金剛山・和泉丘陵、北西は遠く六甲山が見渡せる眺望の良い所である。

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

旧石器時代の石器が出土している遺跡として、西浦橋、万崎池、野々井、鈴の宮、伏尾遺跡が挙げられる。これらの遺跡からは、二次堆積物ながらナイフ形石器や翼状剝片、舟底形石器、有舌尖頭器などが確認されている。センター調査の小阪遺跡I地区第1調査区では、始良Tn火山灰を検出しており、伏尾遺跡と大庭寺遺跡が存在する丘陵上や丘陵斜面は今後注意する必要があろう。

2. 繩紋時代

繩紋時代の遺跡としては、鈴の宮、太平寺、万崎池、菱木下、平井、西浦橋、野々井、小阪、伏尾遺跡が挙げられる。特に注目されるのは、小阪遺跡である。小阪遺跡はその6の調査を契機にしてその後の調査においても繩紋土器・石器と遺構が多く検出されている。繩紋土器は中期から後期にかけてのものが多い。同じ遺跡ではあるが、調査区の異なるその5・7・8・南地区（I地区）においても出土しており、特にI地区で検出された中期末の土器片敷遺構は、注目せられるところである。調査報告によれば遺構は直徑0.7m、深さ0.1mを測る浅い落ち込みに、4個体の深鉢を並べている。落ち込み底部に炭・灰を敷き、2個体の土器を敷く。更に粗砂を盛り上げて2個体の土器を並べる。遺構の性格としては、本遺構が長辺7.2m、短辺3.5mの不整円形の落ち込みの中に位置していることから、住居跡の炉の

可能性も考えられているようである。後期では、F地区の遺物集中区で土器や石器が集中して、2,860余片も出土している。

小阪遺跡の縄紋時代の居住域は、小阪遺跡の北側の丘陵の小阪団地側と、南側の丘陵の伏尾丘陵上に拡がっていたものと思われる。川が穏やかな時は、丘陵から下りてきて生業活動をしたり、あるいは簡単なキャンプ程度の住居を構えて生業を行っていたかもしれない。小阪遺跡の遺物は土器以外に石器も多く検出されており、石鎌、楔形石器、スクレイパー、石匙、石皿、叩石、有舌尖頭器、石槍等と豊富である。小阪遺跡は低位～沖積段丘から氾濫原にかけて位置し、全体的に見れば開析谷に位置しており、周辺の同様な地形を調査する時には注意を要する。

3. 弥生時代

弥生時代の遺跡では、石津川流域の石津、四ツ池遺跡をはじめ、鈴の宮、小阪、万崎池、大庭寺、伏尾遺跡があり、和田川流域では、菱木下、西浦橋、鶴田池東、野々井遺跡が挙げられる。特に四ツ池遺跡と小阪遺跡は前期の古段階の土器が確認されている。小阪遺跡の遺物は、河川や遺物包含層から検出されており、また縄紋土器と一緒に確認されている。

中期では菱木下遺跡と西浦橋遺跡で、堅穴住居や方形周溝墓が確認されており、特に西浦橋遺跡では水利施設の杭列群が検出されている。堅穴住居は和田川流域の野々井遺跡でも確認しており、径10mもある大型の堅穴住居が検出されている。野々井遺跡は多量の木製品も出土しており、古墳時代に継続される大規模な複合遺跡である。大庭寺遺跡の松池（6Aトレンチ）では、落ち込み内より柱状片刃石斧・大型石庖丁完成品・大型石庖丁未完成品・石庖丁未完成品・叩石等の石器が一括で出土している。松池は開析谷を堰き止めた池であるが、泉北地域にはこの様な溜め池が多い。丘陵斜面、特に池内の調査は今後注意を要するであろう。

野々井遺跡の西側、和田川を挟んだ菱木の丘陵には、弥生中期末から後期にかけての遺跡がいくつか存在する。山田北、昭和池、狐池南遺跡が挙げられる。昭和池遺跡では堅穴住居が約10棟確認され、その中に小阪遺跡でみられた2本柱の住居も存在する。狐池南遺跡では隅円方形の堅穴住居の柱穴内からミニチュアの鋸彫形土製品が出土しており、この遺跡の近くで昭和13年に見つかった銅鐸との関連性が注視される。佐原真氏の分類によれば、突線鉢式4式の近畿式B鐸である。

石津川流域の弥生中期～後期の遺跡としては、毛穴、鈴の宮、小阪、万崎池、大庭寺、伏尾遺跡があげられる。協会調査の伏尾遺跡A地区では15棟の住居と土坑、井戸、溝が検出され、2棟の大型住居も確認されている。センター担当調査区においても遺物のみであるが土器・石器が出土している。先の狐池南遺跡と同様に中位段丘上に立地している。

4. 古墳時代

石津川流域のこの時代の最大の画期は、大王陵が造営される百舌鳥古墳群の出現と、須恵器生産が開始される窯跡、いわゆる「陶邑古窯址群」の成立である。この2点は、日本史上においても特筆される事象である。しかし、一方では大古墳の造営や須恵器を生産するに各地域から人々が集まり、そして人工が鬱れた。また大古墳を造墓するのに土を取り、石を取り、丘陵を削った。更に須恵器を焼くのに窯を掘り、粘土も掘り、燃料となる木も伐採した結果、煙害・水害等の自然・環境破壊が著しく増大したことは否めないであろう。

古墳についてみると、石津川流域では河口付近右岸の中位段丘上に先の百舌鳥古墳群が立地し、左岸には塔塚・赤山・経塚古墳が立地する。百舌鳥古墳群も微視的にみれば、石津川支流の小河川と開析谷

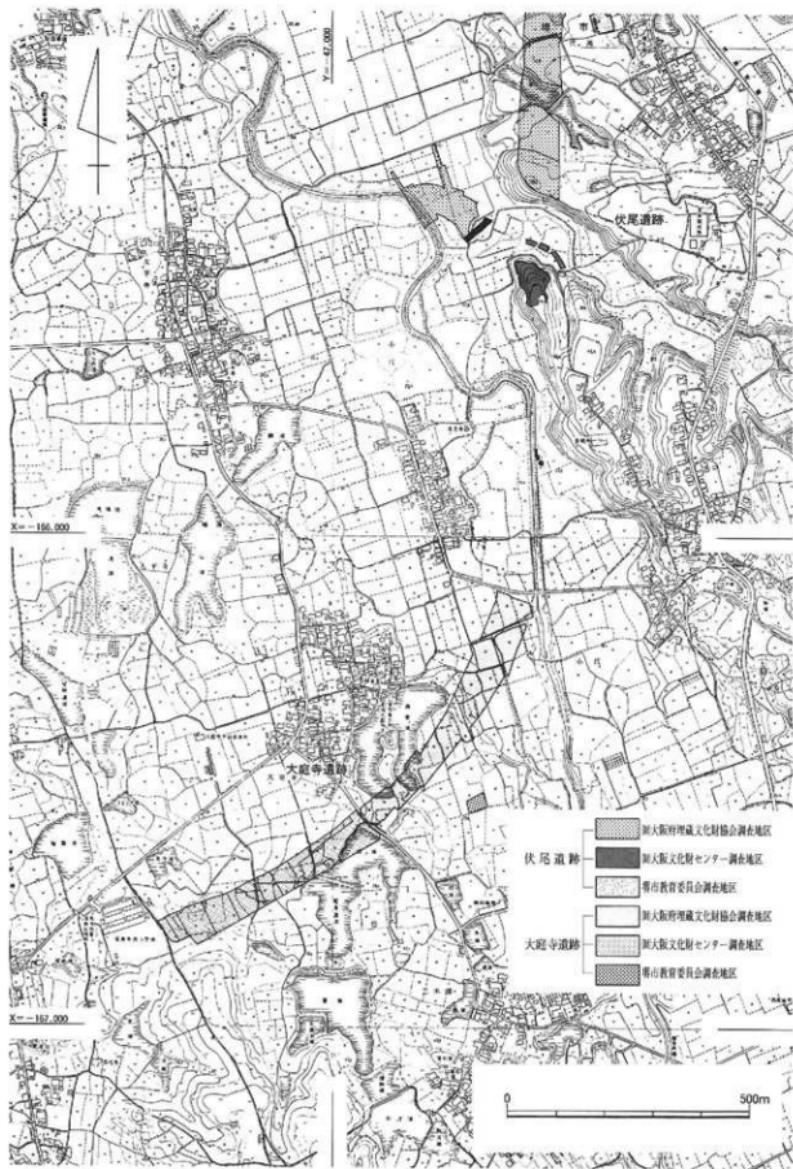


図4 大庭寺・伏尾遺跡周辺地形図

とによって古墳がグルーピングできそうである。もう少し南に下がると石津川支流の陶器川流域に陶器千塚古墳群・御坊山古墳・ツキ塚等の古墳群が存在する。この古墳群とは丁度西側の同じ緯度上に信太山丘陵の先端部に立地し、画文帶神獸鏡等が出土した前方後円墳の和泉黄金塚古墳が存在する。黄金塚古墳の北東1km離れて無名塚・富木車塚古墳も存在する。両者はともに前方後円墳である。これより以南の石津川右岸においては、1980年代後半に伏尾遺跡が調査されるまで古墳が現われてこない。

伏尾遺跡の古墳は、A地区で4基の10数メートル内外の小規模古墳が確認された。古墳群（伏尾古墳群）は円墳1基と3基の方墳で構成されている。その内の1基の方墳では、周溝内より勾玉装飾付器台、家形埴輪、鳥形埴輪等が検出されている。時代は古墳時代中期の5世紀後半である。これらの古墳群の南方約200mの所、谷を隔てた丘陵に本調査区が存在する。丘陵には3基の古墳が存在し、小代古墳群と呼称されている。本古墳群は大半が破壊され、墳形・規模・時代等不明瞭な点が多いが、柳葉式鉄鎌、黒斑を有する円筒埴輪、方頭斧箭式鉄鎌、古式土器の出土より5世紀前半に位置付けられる。その内の2号墳は円墳と考えられ、直径が約30mを測る。泉北地域にあっては時代がやや下るが、野々井遺跡の野々井1号・10号墳と同規模か、もしくはそれ以上の規模をもつ古墳である。なお野々井1号・10号墳は、前方後円墳かまたは帆立貝式古墳である。さらに野々井南遺跡では、全長約24mの帆立貝式古墳の大芝古墳が存在している。さらに南方の同一丘陵上に古墳時代後期の牛石古墳群が立地しており、全長約70mの前方後円墳が存在する。小代古墳群と同時期の古墳を求めようとすれば、二本木山古墳が挙げられる。二本木山古墳は牛石古墳群の西側の和田川を挟む丘陵上に立地しており、墳丘径12m、墳丘高2mを測る円墳である。小円墳ながら内部主体部は繩掛突起を持つ和泉砂岩製の割竹形石棺が直葬され、棺内には男女1体ずつ計2体が埋葬されていた。遺物は鉄劍のみ1点が出土している。

次に集落遺跡についてみると、古墳時代前期では石津川河口付近に船尾西遺跡のほか、石津町遺跡、鶴田町遺跡、四ツ池遺跡が立地する。石津川を遡って伏尾遺跡周辺では小阪遺跡その6調査区や、その7調査区と、それに隣接する堺市調査地点において弥生時代後期から庄内・布留式期にかけての土器が出土する溝や河川・土坑が検出されている。和田川流域では弥生時代後期から継続される野々井遺跡が挙げられる。野々井遺跡では多くの住居址が確認されており、また須恵器が生産される墳の住居址や建物跡、古墳も確認されており、この地域にあっては拠点的集落であったに違いないであろう。

古墳時代中期の伏尾遺跡周辺においては、陶邑古窯址群の成立期、いわゆる初期須恵器出現の墳の集落として小阪遺跡その3調査区がある。遺構は堅穴住居7棟、建物5棟、井戸、土坑、溝、Pit等で構成されており、初期須恵器が多量に検出されることや、納屋的な建物が存在することから、小阪遺跡その3調査区の集落も何らかの形で須恵器生産に携わったものと推測される。

小阪遺跡とほぼ同時期の深田橋遺跡では、倉庫、櫛列、土坑が確認され、石津川に近接していることから須恵器の集散地と考えられている。深田橋遺跡の丁度東側に初期須恵器のTK73号窯跡と多治速比充神社が存在する。TK73号窯跡とほぼ同時期の窯跡は大庭寺遺跡のTG231号窯跡とTG232が挙げられる。

生産遺跡についてみると、伏尾遺跡と大庭寺遺跡は我が国最大の数を誇る陶邑古窯址群の中心地に位置しており、窯跡は河川、谷、丘陵によってグルーピングされるが、陶邑古窯址群の地区割は河川によっておこなわれている。伏尾遺跡周辺は高藏地区（略号TK）にあたり、大庭寺遺跡は姆地区（TG）にあたる。先のTK73号窯跡は小代古墳群と同一丘陵上にあり、約1.2km離れている。小代古墳群の周辺にはTK73号窯と同時期のTK85号窯跡、TK87号窯跡が存在する。大庭寺遺跡のTG231号窯跡とTG232号窯跡は、TK73号窯跡と石津川を挟んで西方約1.2kmの所に位置しており、近畿自動車道建設に伴って新規



1. 大庭寺遺跡 2. 野々井道路 3. 佐佐南遺跡 4. 萩田橋遺跡 5. 伏尾道路 6. 山田古墳群 7. 山田道路 8. 山田北道路
 9. 鶴田池東遺跡 10. 西瀬橋遺跡 11. 要木下遺跡 12. 万崎池遺跡 13. 太平寺遺跡 14. 小阪遺跡 15. 平井道路 16. 斐山道路
 17. 陶器千塚 18. 辻之道路 19. 田園道路 20. TTK3号窯跡 21. 古谷城跡 22. 壱山城跡 23. 豊田道路 24. 片尾道路
 25. 上池更遺跡 26. 岡田寺跡 27. 寺池遺跡 28. 泉田中古墳群 29. 泉田中遺跡 30. 蔵谷・富藏遺跡 31. 光明池38-1号窯跡 32. 牛石古墳群
 33. 野々井南遺跡 34. 桜尾原古墳群 35. 佐田寺遺跡 36. 二本木山古墳

図5 周辺の遺跡

に発見され、発掘調査された遺跡である。窯体自体は調査されていないが、灰原より夥しい量の須恵器が出土しており、時期はTK73号窯跡よりも遅る。これら2基の窯跡は現在溜池になっている濃登ノ池に埋没していたが、陶邑古窯址群周辺の溜池は、開析谷を堰き止めて造られており、窯跡のみならず多くの遺構が埋没していると思われる。大庭寺遺跡の窯跡は、陶邑古窯址群の中で最古段階に位置付けられ注目されるが、窯跡とは谷を挟んだ丘陵の東斜面に4世紀から5世紀前半の堅穴住居址が存在し、住居址の中から初期須恵器と共に軟質土器が確認されたことや、多量の土器が投棄された土器溜・谷・河川が検出されたことは須恵器生産開始時期の工人集団の集落構造を考える上で重要な資料を提供したと言えよう。

大庭寺遺跡より更に西方へ約1.6kmの所、先の狐池南遺跡においても初期須恵器の窯跡1基が確認された。時期的には大庭寺遺跡の窯跡とはほぼ同時期であるが、やや新しいと思われる。

これら初期須恵器窯跡の立地をよく観察すると、立地条件が非常に似ていることに気が付く。そして重要な事は3遺跡の窯跡は標高がほぼ同じで、しかも同じ緯度上に立地している点である。さらに掘り下げてみると、これら窯跡の背景には前期古墳もしくはこの地域の盟主的な古墳が存在することである。窯の築造選地に関しては、単に自由に造る事は出来ず、恐らく何らかの形で規制があったものと考える。

他の生産遺跡で見落としてはならないのが、堺市鷺松南高田遺跡や陵西遺跡である。両遺跡からは玉作り工房址が検出され、滑石製模造品製作遺跡であることが判明し、大阪府内でも数少ない遺跡である。百舌鳥古墳群内に立地していることから百舌鳥古墳群や、祭祀遺跡である百舌鳥夕雲遺跡や、大仙中町遺跡へ供給されたものと考えられる。なお陵西遺跡は陵西技法で知られる。伏尾遺跡周辺に於ても小阪遺跡南その2-2調査区で滑石製の剣形石製品が出土しており、またそれより南西約200mの堺市教育委員会調査の大阪遺跡（KSK-2）でも滑石製の双孔円板や、白玉が住居址周辺より出土しており、注目される。

他の生産遺跡としては、百舌鳥梅町遺跡、日置荘遺跡で埴輪窯が検出されている。土師遺跡や陵南遺跡では鉄・塩の工房址が確認されている。鉄については大庭寺遺跡で多量のスラグと鞴の羽口が土坑より検出している。

5. 歴史時代

和泉の古代においては僧行基の活躍が目立つ。行基自身が伏尾遺跡の北方約3.5kmの所に所在する家原寺の地で生まれたことに関連するものと思われ、周辺に深井尼院、大野尼院、檜尾池尼院、大野寺、家原寺、蜂田寺をはじめ鶴田池院、大庭院が造られ、また鶴田池、檜尾池、土室池等の治水土木工事も行い、大鳥布施屋をおいて庶民の救済も行った。大庭寺遺跡では奈良時代と平安時代の建物跡・柵列が検出され、遺物においても埴、瓦や埴仏、陶硯（蹄脚硯含む）、統一新羅系土器等が確認されているので伝承の大庭院との関係で注目される。また中世の包含層より出土した木簡に墨書きされた「・・・□寺木引初船五本・・・」は、寺院の存在を可能ならしめ、協会調査区においても「大」とヘラ書きされた瓦や、風字硯が出土しているので否定できないであろう。また瑪瑙製の勾玉の出土は大庭造の存在が推測される。

最後に伏尾遺跡周辺で、特に小阪遺跡その6地区や南その2-2地区、さらにその周辺において墨書き土器や墨書き人面土器が検出されている。現在小阪西町から原ノ池の北側を通って平井、そして福田、日置荘へと続く東西の道が存在しているが、この道は西方の堺市の草部にいたる道である。草部は律令体制下に置かれた駅であり、交通の要所である。本道が古代においても存在していた可能性があるとすれば

ば、小阪遺跡や伏尾遺跡周辺は重要な場所であったと言えよう。

参考文献

- 藤澤一夫「野々井二本木山古墳の調査」『大阪府の文化財』1962 大阪府教育委員会
『陶邑VI-1』大阪府文化財調査報告書第35号 1987 大阪府教育委員会
中村 浩「二本木山古墳の調査」『陶邑VII』大阪府文化財調査報告書第37号 1990 大阪府教育委員会
『堺市文化財調査報告』第22集 1985 堺市教育委員会
『堺市文化財調査概要報告』第34冊 1993 堺市教育委員会
『堺市文化財調査概要報告』第47冊 1994 堺市教育委員会
『小阪遺跡調査の概要』その1～8 1985～1989 則大阪文化財センター
『小阪遺跡調査の概要』南その1～南その2～2 1988～1990 則大阪文化財センター
『小阪遺跡本報告書（本文編）』1992 則大阪文化財センター
『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』I 1981 則大阪文化財センター
『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』II 1982 則大阪文化財センター
服部文彦「山田北遺跡の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第21回）資料』1990 則大阪文化財センター
『陶邑・伏尾遺跡A地区』大阪府埋蔵文化財調査報告書第60号 1990 則大阪府埋蔵文化財協会
「狐池南遺跡発掘調査報告」「現地説明会資料」35 則大阪府埋蔵文化財協会
前田洋子「堺市泉ヶ丘町伏尾出土の石鎌について」『同志社考古』1 1961
小野山節「稻作技術の伝来」『堺市史』統編第1巻 1971
梅原末治「和泉発見の銅鐸」「増補銅鐸の研究」1980
梅原末治「銅鐸に関する若干の新知見（福泉町発見銅鐸）」『考古学雑誌』31 1909 日本考古学会

第3章 大庭寺遺跡の遺構および遺物

第1節 基本層序と遺構の概要

大庭寺遺跡において検出された遺構は弥生時代落ち込み、6～7世紀の溝・土坑・Pit群、6世紀中葉から後葉と7世紀後葉から8世紀初頭の須恵器窯跡2基、6～8世紀前半の土坑群、8世紀前半・10世紀の建物群、中世耕作痕、近世池堤防・井戸・土坑墓である。

本調査区は泉北北線に沿って大庭寺交差点からコオロギ橋（陸橋）までの全長470m、幅60～70mを測り、現況はほぼ田畠で占められ、若干の家屋の敷地跡が残る。調査区の地形は前述したように中位段丘上に位置しており、その中には4Bトレンチ西端から7C・5Cトレンチ東端にかけてと1C・3Cトレンチで検出された谷・河川も存在する。またA地区東端の6Aトレンチの松池はその南の尾美濃池から松池、濃登ノ池と連なる深い開析谷が復元できる。1C・2Cトレンチで検出された旧池は谷地形を近世に更に掘込んで溜池として利用していたようであり、池内には近世の包含層のみが残存していた。調査区の土層の様相は家屋による攪乱の他、調査区南側では泉北北線の造成による包含層・地山の削平があり、特に2Cトレンチの南隅は福泉中央小学校へ向かう地形が改変されている。つぎに調査区東側より基本層序を記すが、調査区南壁は前述のような削平の状況により、付図1の柱状図は調査区北壁の層序を使用したものである。また、6Aトレンチの松池に関しては図15である。

A調査区は約10～30cmの耕土を取り除くと黄褐色粘土の地山の遺構面が検出されており、建物36から東側は地山面の削平も大きく受けている。A地区の全域は包含層を持たないが6Aトレンチは前述したように深い開析谷の地形となり、近世に溜池として利用がなされている。池内のへどろ状の泥質物は機械掘削にて除去し、その下には礫を含んだ黒色粘土質シルトの古墳時代から中世の包含層が1.4～2.0m、更にその下層には黒色の砂礫の古墳時代の包含層が約1m堆積していた。谷底には古墳時代の自然流路が流れしており、一部弥生時代の遺構が残存していた。また、この谷地形の斜面を利用した須恵器窯跡が2基、同時代の井戸が3基検出された。6Aトレンチの谷地形は近世に北東側を堰き止めることによって松池を構築している。

A地区の西端の建物9よりB地区にかけては15～30cmの遺物包含層があり、上層の約5cmの黄褐色砂質土には中世から古墳時代の遺物が、下層の10～20cmの黄灰色砂質土には古墳時代の遺物が含まれている。これら2層を除去することにより遺構が検出される。B地区の包含層は泉北北線に近づくにしたがって薄くなり、4Bトレンチの建物41検出地点では現代の盛土約1m、包含層約5cmとなる。4Bトレンチの西端から7C・5Cトレンチ東端にかけては南北に蛇行しながら流れる幅3～6m深さ約40～60cmの河川が検出されている。褐灰色砂質土、黄灰色シルト質粘土の埋土を持つ。5Cトレンチ南端の河川西肩部では多量の炭化物と共に土器が集中して出土している。

C地区では5Cトレンチの層位は耕土下に約5cmの中・近世の遺物を含んだ明黄褐色砂質土があり、この層を除去することにより1C・3Cトレンチで検出された黒灰色粘土を埋土とする浅い谷地形が確認される。谷埋土は浅く、約5cmを測る。5Cトレンチ北端では明黄褐色砂質土を除去すれば谷地形は見られず、地山面が検出される。

7C・8Cトレンチ部分では耕土下に明黄褐色砂質土が存在せず、谷埋土である黒灰色粘土、或いは地

山の黄橙色粘土が現われる。谷埋土は約5cmを測る。土坑は谷埋土面から検出されたが、一部は地山面にて検出されている。また、7Cトレンチ東側では河川1が検出されており、南北方向の現水路攪乱より東においてB地区で確認されている上層の黄橙色砂質土、下層の黄灰色砂質土が確認されている。

3C・1Cトレンチにかけては中世の遺物を含む約10cmの明黄褐色砂質土の遺物包含層があり、これを除去することにより黒灰色粘土の埋土を持つ深さ10~30cmの深い谷が検出される。この谷中とその周囲からは約2700基弱の土坑が検出されており、その遺構面は谷中の灰白色粘質土の地山面より若干、谷が埋まつた面から切りこんでいると考えられる。しかしながらこの面での検出は非常に困難であり、地山面を検出することにより上坑を確認できる状況であった。なお、谷の肩部周辺では谷検出面において土坑を確認している。土坑はこの深い谷の周辺にまで拡がって分布しているが、その数は谷中に比較すれば非常に少ないものである。土坑は2Cトレンチの西隅から4Cトレンチ北東隅においても検出されている。

2Cトレンチ西隅は後世の開発による田畠の段が存在し、北側にはにぶい黄橙色粘質土の包含層があり、除去することにより土坑が検出される。この段の南側は大きく削平を受け、包含層はもとより地山もかなり削平されている。2Cトレンチ南隅はニュータウン造成時の削平を大きく受けしており、遺構は残存していない。また、1Cと2Cトレンチにかけては旧溜池があり、泥質層を除去すれば青灰色シルトから砂礫の地山が検出され、溜池造成時に大きく掘削を行っているようである。南東隅のみ古墳時代遺物を含む砂礫が残存する。近世に谷地形を大きく改変しているようである。

4Cトレンチの層位は上層より現耕土が約20cm、その下層に浅黄色からにぶい黄橙色の地山に近似した砂質土が約20~30cm存在する。これらは近世時の開発による盛土と考えられ、一部にはこの盛土がなく、現耕土下は地山になっているところも存在する。また、東端では、盛土以前の旧耕土が存在し、その下層に約15cmのにぶい黄橙色粘質土がみられ、東の2Cトレンチへと続く。このにぶい黄橙色粘質土にも近世の遺物が含まれている。

6Cトレンチの層位は上層より、現耕土・盛土が約30~50cmみられ、その下層に4Cトレンチと同じく黄橙色の地山に近似した砂質土が約20~50cm存在し、地山に至る。また、ここは造園業者によって利用されていたため多くの円形の擾乱が断面に現われている。この地点の地山には上層の黄橙色の盛土が管根状に入り込んでおり、断面にて観察することができる。4Cトレンチの西側断面においても確認することができた。その性格は不明である。

以上のように地山面に古墳時代から近世の遺構が同一面で検出された。

第2節 弥生時代以前（図6~13、写真図版47~50）

弥生時代以前の遺構としては唯一、弥生時代に属する落ち込み42がある。他には後世の遺構や包含層から、縄紋、弥生時代の石器が少しと、6Aトレンチの埋没河川堆積層から弥生土器が数点出土している。

1. 落ち込み（図6~9、写真図版7・47~49）

弥生時代の遺構として、6Aトレンチの落ち込み42があり、ここからは石器のみ出土した。落ち込み42は6Aトレンチ北東端に位置し、T.P.+30.5mである。規模は径1.8×0.6m以上、深さ約0.15mを測り、平面形は長円形を呈する。遺構は開析谷斜面裾部に位置し、とくにテラス状に突出し、緩やかに傾斜している所に立地している。

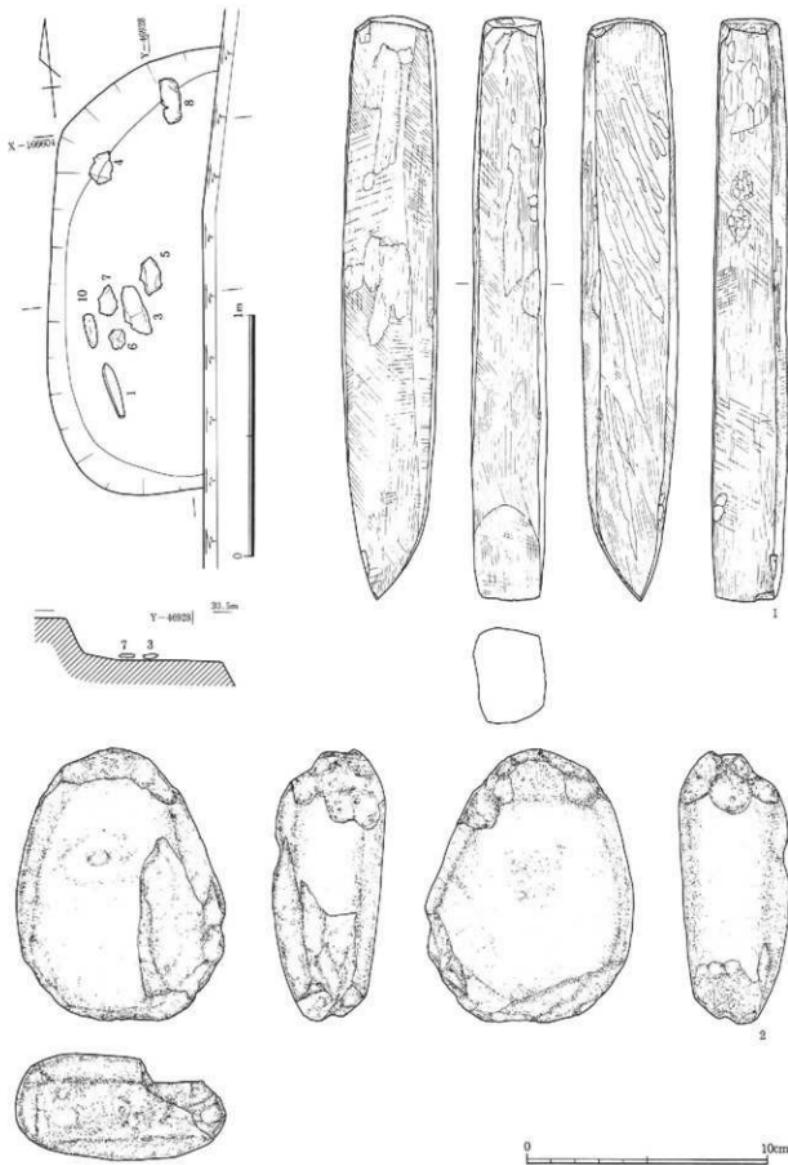


図6 落込み42平・断面図および出土石器

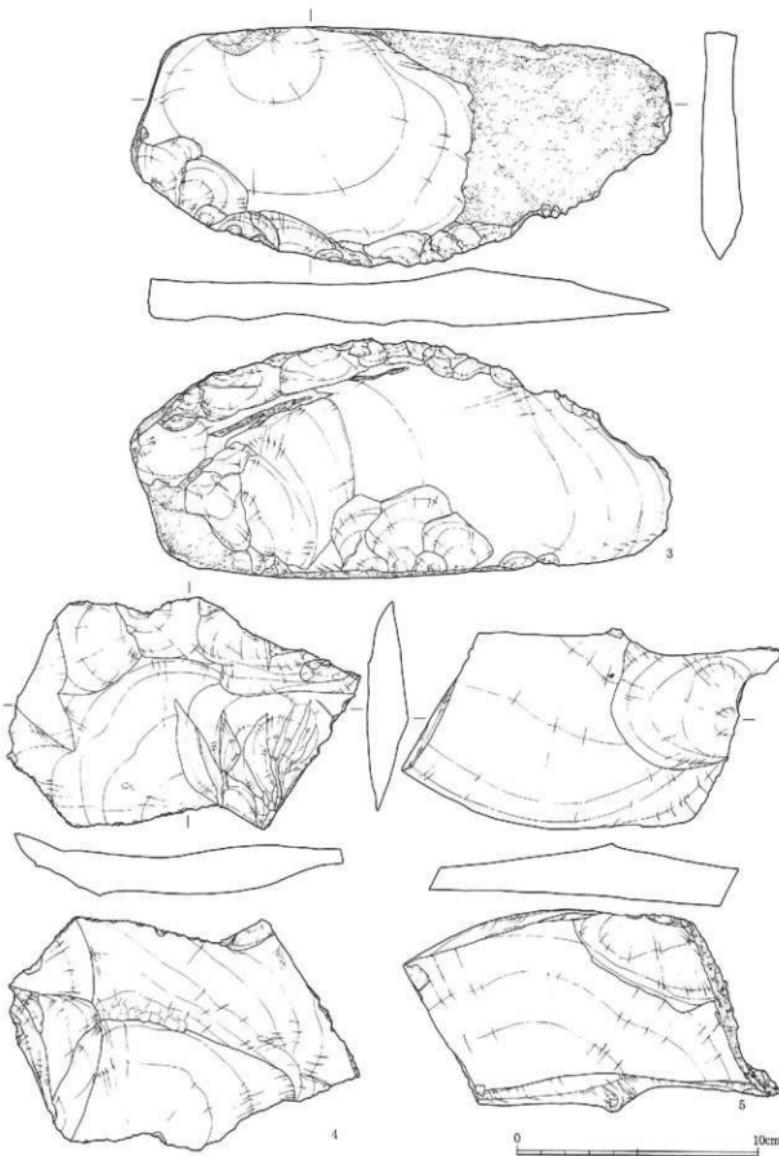


図7 落ち込み42出土石器

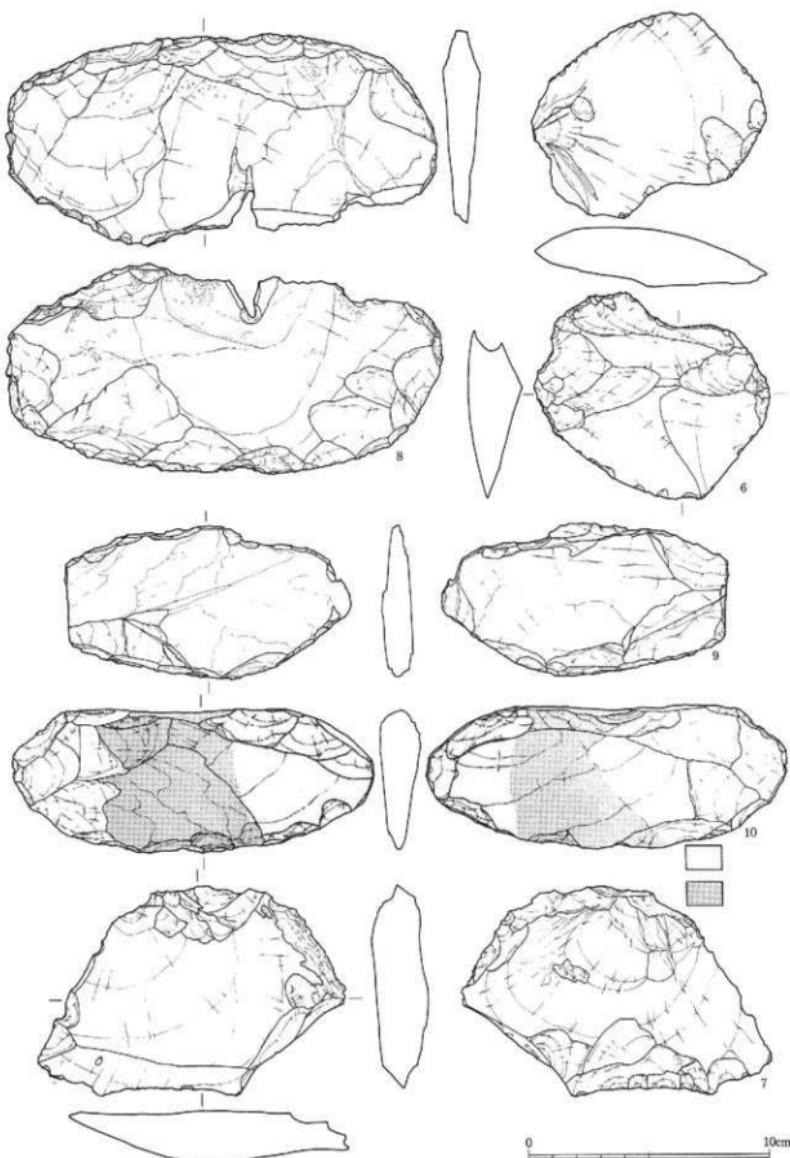


図8 落ち込み42出土石器

落ち込みの埋土は、細砂（腐植物堆積）である。本遺構の上位には、弥生中期の河川堆積の粗砂～小礫の層と、この層を削って堆積する弥生後期以降の河川堆積層の砂礫が存在するが、石器類は河川の流れによって運ばれてきたものではなく、また後世の掘削の際に決して紛れ込んだ物でもない。遺構自体は、人為的なものかどうか不明瞭なので落ち込みとしたが、本遺構の近くで、石器製作が行われていたことは否めないであろう。弥生中期に流れていた河川の岸で、石器製作が行われていたが、ある時期に本遺構へ投棄され、その後、中期の河川の堆積層で覆われた。そして、後期の河川の急激な流れで中期の層は大半削られたが、石器が検出された遺構と、中期河川堆積層の一部が残されたと考える。

調査地の松池は本来開拓谷で、北側の濃登ノ池や、南側の尾美濃池、筆池とは一連の谷である。このような谷には、弥生時代の多くの遺構・遺物が埋没していると思われる。

落ち込み42出土遺物として、柱状片刃石斧1点、大型石庖丁未成品1点、石庖丁未成品2点、不定形刃器4点、剝片1点、叩石1点がある。大型石庖丁はこれら石器の上位で出土した。

1の柱状片刃石斧は緑色片岩を石材とする、抉りの無い完形品で、長さ24.1cm、幅3.02cm、厚さ3.9cm、重量648.8gを測る。石斧の刃先には長軸方向にごく短くのびる線状痕および剥離がみられる。全体に丁寧なつくりで、使用によるためか、研磨の線状痕をあまり残していない。頭部、両面、両側面には研磨の及ばない剥離面を一部留め、それは両側面により多く残る。片刃の側の頭部は使用によるためか光沢がみられる。

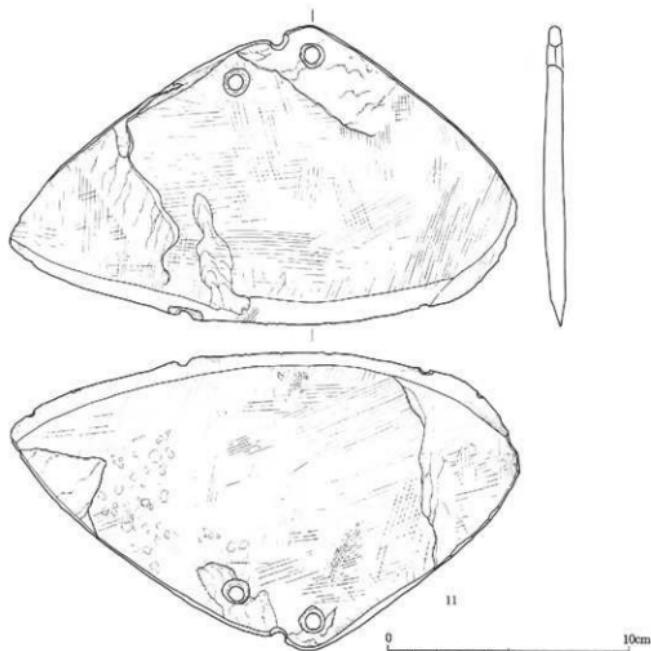


図9 落ち込み42出土石器

2は砂岩製の叩石で、長さ11.1cm、幅8.6cm、厚さ4.5cm、重さ586.7gを測る。叩石はやや扁平な自然縛を素材とし、両面に叩打による窪みがみられるが、上・下端部に集中して叩打痕が残る。

11は緑色片岩製の大型石庖丁である。法量は長さ20.9cm、幅12.2cm、厚さ0.9cm、重さ287.2gを測る。平面形は三角形状で、背部にあたる頂部に3個の紐穴を有し、そのうちの1個は背部に接して穿孔され、半分残存している。体部両面には主に長軸方向の、背部には主に長軸と直交する方向の、研磨による線状痕を残す。刃部は両面に光沢を有し、特に裏面に光沢が顕著である。

8～10はいずれも緑色片岩を石材とする剥離成形段階の石庖丁の未成品である。8は平面が長い梢円形状の大型石庖丁の未成品と思われるもので、周縁から剥離を施し、厚みをとっている。研磨はまだ施していない。刃部側と思われる縁の約半分は新しく欠損している。9は直線的な表面左端部に自然面を留める。周縁から剥離されているが、体部中央に厚みを残す。表面下部に石英質の層が片岩に噛んでいる。10は火を受けて、表面右半分、裏面左1/3が変色し、表面が荒れている。周縁からは剥離が施されているが、背部側に厚みを多く残す。背部には長軸と直交する方向の線状痕が顕著に認められる。

3～7は材質がサヌカイトで、5は剥片、それ以外は不定形刃器である。落ち込み42出土のサヌカイトは、包含層他出土のサヌカイトが小さめであるのに対し、全体に素材となる剥片の大きいのが特徴である。3は2辺と1辺の一部および表面の1/3に自然面を残し、表・裏面に大剥離面を留める大型の不定形刃器である。自然面と反対の辺は両面側へ剥離させて刃部を作り出している。4は変形の四辺形状で、表面・裏面共に大剥離面を残し、表面右側辺に自然面を留める。自然面を残す辺以外の3辺に微細な剥離が認められるが、使用による痕跡か。5は平行四辺形状の1辺に自然面を残し、表・裏面に大剥離面を留める厚手の剥片である。2辺は折れ面、残りの1辺は牒番剥離のように剥離した端部が丸く終わっている。6は最終の大剥裏面の打点に点状の自然面を残し、周縁には微細な剥離がみられるが、使用によるものか。7は他のサヌカイトに比べ質の粗い材質である。1辺に自然面を残し、裏面に最終大剥離面を留める。刃部は裏面側へ剥離調整が施されている。

2. 包含層、その他出土遺物（図11～13、写真図版49・50）

後世の遺構および包含層から、程度の差はある、風化の目立つサヌカイト片が、合計81点出土している。その分布状態は図10のとおりである。サヌカイト片は6A地区に若干多いものの、C地区以外の全域から、ほぼ偏りなく出土している。

縄紋時代の石器と思われるものは12～14、25で、材質は全てサヌカイトである。12は抉入石器で、一方の側縁を抉り、反対側の辺に細かい刃が付く。13・14は凹基式の石鏃であり、13は2Bトレンチの建物34（Pit2152）からの出土である。14は風化が著しいが、4CトレンチPit2818出土である。25は風化の目立つ横形の石匙で、刃部の剥離は片面側に粗く、つまみ部の反対側にあたる側縁には一部自然面を留める。25は5Cトレンチ土坑2788出土である。

弥生時代の石器と思われるものは15～24で、材質は全てサヌカイトである。15は平基式石鏃であり、縄紋晩期から弥生前期にかけてのものか。15は小ぶりで薄く粗雑な作りで、先端が欠損している。16は薄手の凹基式石鏃で両側縁から鋸歯状剥離が施されている。18、20は円基式石鏃、19、21、22は凸基有茎式石鏃である。18は周縁から鋸歯状剥離が施され、薄手で、全体に風化している。21はサヌカイトの質が粗く厚手で、先端部および基部は欠損している。先端部は錐として使用して折れ、一部磨滅したかのような痕跡を留める。石鏃から石錐へ転用したものか。22は薄手で丁寧な剥離調整が施されている。23は石小刀の先端部破片と思われるもので、内湾する側縁の先端部分から最先端部分までのエッジは齊

滅している。24は石錐で、錐部先端が折れている。

表1 大庭寺遺跡石器一覧表

() 内残存値

遺物No	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	残存状況	石材	備考
1	柱状片刃石斧	241.0	30.2	39.1	648.8	完形	緑色片岩	
2	叩石	111.0	86.0	45.2	586.7	完形	砂岩	
3	不定形刃器	223.0	97.7	25.5	599.6	完形	サヌカイト	
4	不定形刃器	144.5	94.5	18.1	236.0	完形	サヌカイト	
5	剝片	156.0	82.3	24.7	344.8	完形	サヌカイト	
6	不定形刃器	96.0	85.0	22.9	165.7	完形	サヌカイト	
7	不定形刃器	127.0	86.0	22.0	248.5	完形	サヌカイト	質粗い
8	大型石庖丁未成品	180.0	85.5	15.8	(275.2)	一部欠損	緑色片岩	
9	石庖丁未成品	117.5	62.0	14.5	121.6	完形	緑色片岩	
10	石庖丁未成品	148.5	58.0	16.2	196.7	完形	緑色片岩	
11	大型石庖丁	208.7	122.3	9.0	287.2	完形	緑色片岩	
12	抉入石器	(28.1)	17.0	3.4	(1.8)	一部欠損	サヌカイト	
13	凹基式石礫	(22.9)	18.6	3.3	(1.1)	先端欠損	サヌカイト	
14	凹基式石礫	(23.7)	16.4	3.2	(0.8)	返り一部欠損	サヌカイト	風化
15	平基式石礫	(19.6)	16.3	3.1	(1.2)	先端近く・返り一部欠損	サヌカイト	
16	凹基式石礫	(24.3)	(20.3)	3.2	(1.4)	先端・返り一部欠損	サヌカイト	
17	凹基式石礫	(18.5)	(13.8)	3.3	(0.8)	先端・側縁・返り一部欠損	サヌカイト	
18	円基式石礫	(43.9)	18.7	4.5	(3.2)	先端・側縁一部欠損	サヌカイト	風化
19	凸基有茎式石礫	(47.4)	21.2	7.1	(6.1)	基部欠損	サヌカイト	
20	円基式石礫	(24.4)	11.3	4.2	(1.3)	先端・側縁一部欠損	サヌカイト	
21	凸基有茎式石礫	(56.7)	21.8	9.7	(11.8)	先端・基部欠損	サヌカイト	やや質粗い
22	凸基有茎式石礫	(57.2)	(24.5)	7.0	(9.8)	先端・両側縁一部・基部欠損	サヌカイト	
23	石小刀	(24.1)	(14.2)	4.2	(1.4)	先端残存	サヌカイト	
24	石錐	(37.9)	26.7	6.3	(6.0)	舞部先端欠損	サヌカイト	
25	石匙	62.4	(42.3)	11.0	(28.7)	背部・刃部一部欠損	サヌカイト	風化
26	不定形刃器	(71.5)	40.8	11.0	(36.7)	刃部一部欠損	サヌカイト	
27	不定形刃器	(68.8)	40.3	12.0	(29.8)	一端欠損	サヌカイト	風化
28	不定形刃器	68.2	(38.0)	9.9	(24.9)	刃部一部欠損	サヌカイト	少し風化
29	剝片	(48.9)	35.6	14.5	(19.3)	一部欠損	サヌカイト	風化
30	叩石	(108.5)	64.6	(67.0)	(681.3)	一端欠損	砂岩	
31	叩石	(82.0)	(65.0)	39.0	(250.1)	一端欠損	砂岩	
32	叩石	(114.0)	80.0	61.0	(872.2)	一端欠損	砂岩	

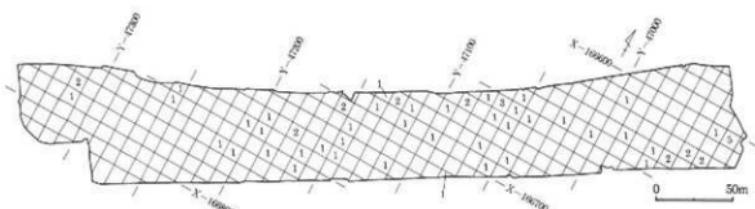


図10 サヌカイト地区別出土点数

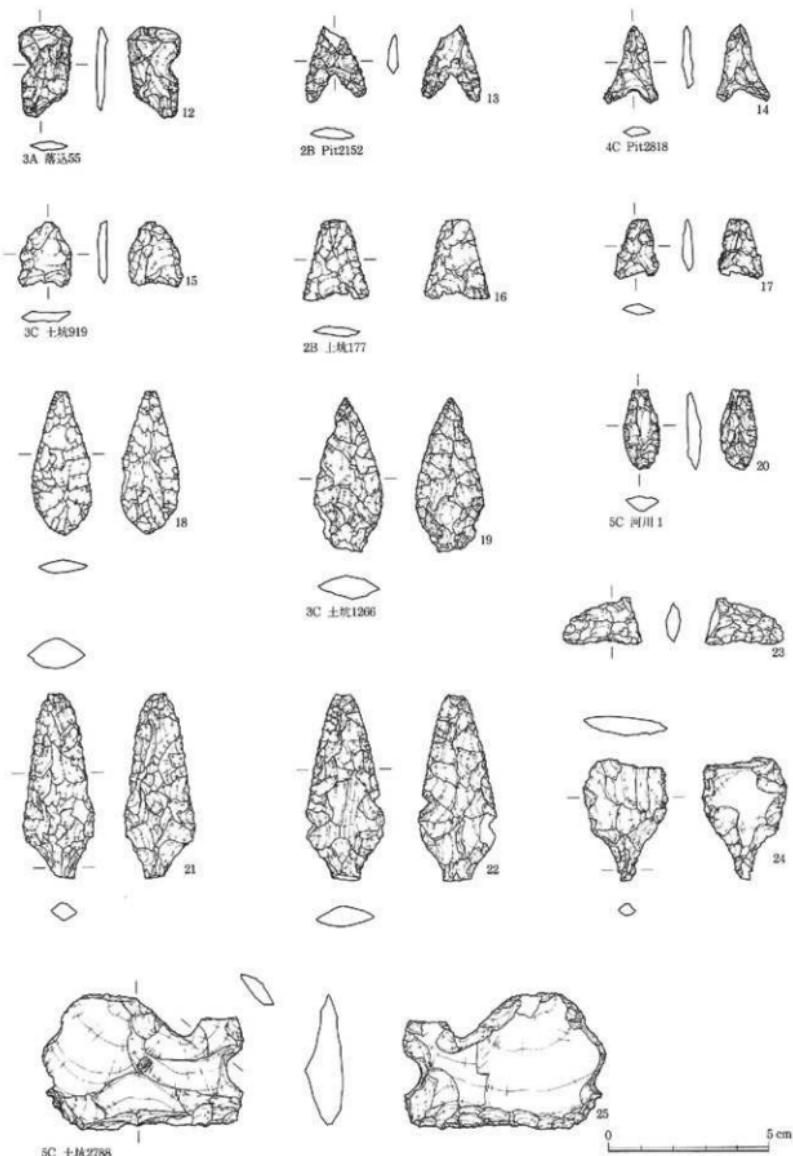


图11 包含层他出土石器

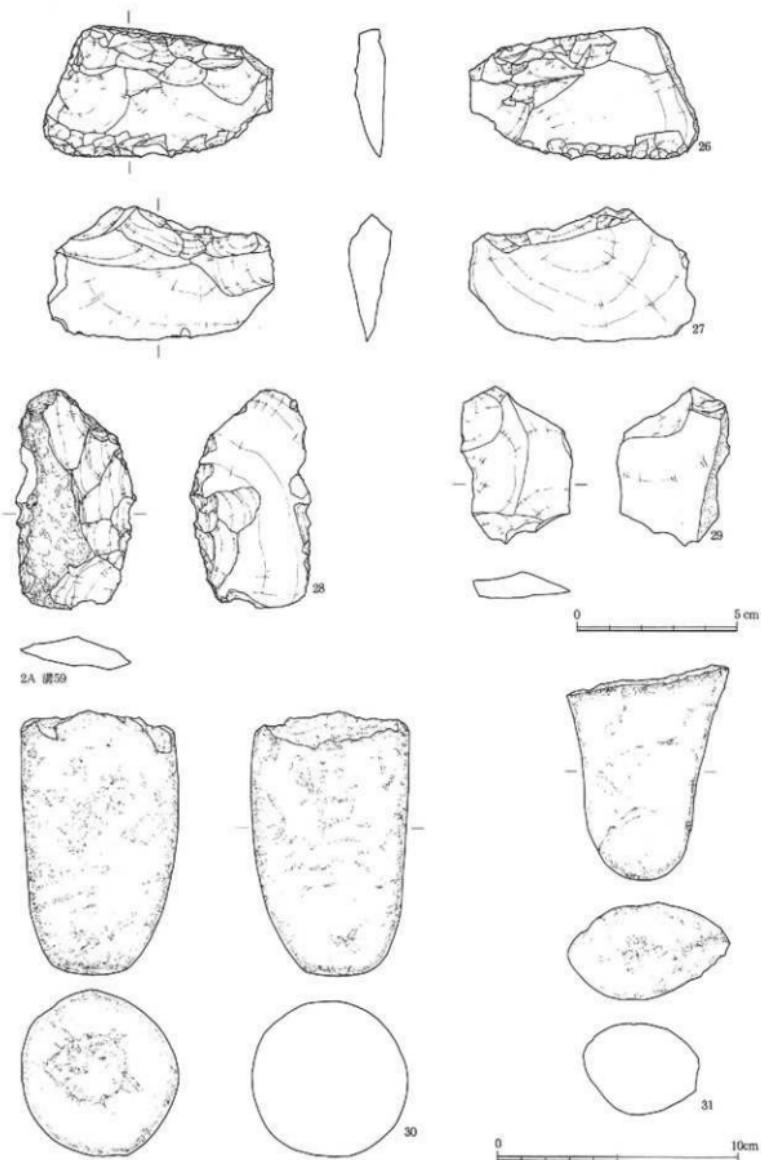


图12 包含层他出土石器

図12、13の石器は縄紋か弥生か時期不明のものである。26～29はサヌカイトを石材とする剝片および不定形刃器である。27は近世戸から出土した全面風化の著しい剝片である。30～32は砂岩の自然礫を用いた叩石である。30は礫周囲に細い筋状の叩打痕があり、上端折れ破損面の突出部分に叩打痕がみられる。30の下端部は叩打および摩ったような痕跡を留め、径約3cmの平坦面をなす。31および32は自然礫の一端が欠損したもので、残る一端の礫面および両面中央・両側縁中央に少しだが叩打痕がみられる。32は1Bトレンチ溝1出土である。

弥生土器は6Aトレンチの埋没谷河川の堆積層からわずかだが出土している（図13）。33は中期円板充填法による高杯部破片であり、落ち込み42の上位にあたる弥生中期の河川堆積の粗砂～小礫の層から出土している。34は中期末から後期初頭の高杯脚柱部であり、この1点のみ胎土中に角閃石を含む生駒西麓産の土器である。35～37が後期の土器である。35は壺口縁部で浅黄色をした胎土中に微粒の金雲母を含む土器である。35の外表面はヘラ磨き、内面はナデ調整であ

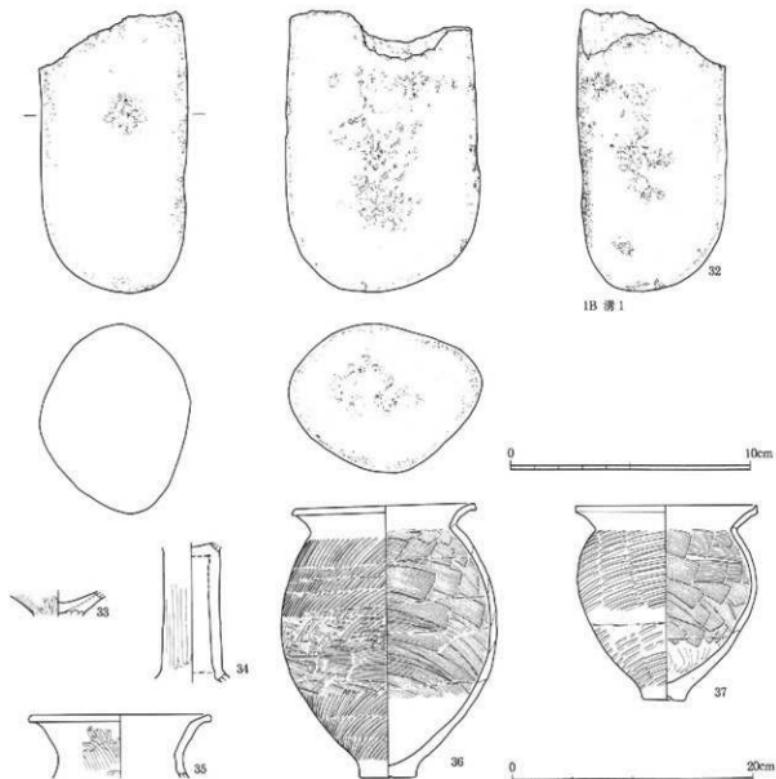


図13 包含層他出土石器および弥生土器

る。36、37は甕の完形品である。2点共に体部外面を叩いた後、体部中央をなでておらず、内面はナデ調整を施している。37は底部外面が上げ底になっており、口縁部は端部をわずかに上方へつまみあげている。甕は2点とも、口縁部から体部にかけての外面に煤が付着している。

第3節 古墳時代

古墳時代の遺構として建物4棟、井戸2基、溝多数、土坑多数、窯1基、落ち込みがある。古墳時代遺構のなかでも建物と溝はA・B地区にまとまっている。また、土坑はA・B地区とC地区の両地区にみられた。C地区的ものは古墳時代後期から奈良時代にかけての密集型土坑群であり、時期に幅がみられるため飛鳥～奈良時代の土坑の項目で報告している。

古墳時代の遺物としてはそのほぼ大多数が須恵器であり、土師器の出土は極めて少ない。また、古墳時代の遺物として取り上げたのは、杯蓋にかえりの付かない、中村編年のII型式までのものとした。

包含層出土遺物については6Aトレンチの埋没谷から、古墳～奈良時代にかけてのものが多く出土している。埋没谷の堆積状況については、図14～19に示すとおりである。

埋土は下層から砂礫、粘土質シルト、砂質土、粘土、攪乱土・近世以降堆積粘土の5層に分けられる。

最下層の砂礫は、T.P.+29.8～31.4mに層厚約1mで存在する。本層は弥生時代の層を削り、何回か流れている様である。C地点付近では、中州状にシルトが堆積している（図15）。遺物は下位で弥生時代後期から古墳時代前期の土器が、上位でII～III型式の須恵器が多く出土している。

粘土質シルトは全体に黒色を帯び、礫が多量に混入する。T.P.+30.8～31.7mにあり、層厚0.2～0.6mを測る。この層は更にA～C地点付近で2層に分けられる。下層は黒色粘土質シルトに礫が多く含む層で、上層は灰黒色粘土質シルトに礫が密に多く含む層である。遺物は下層では6～8世紀の遺物が主流を成すが、黒色土器、墨書き筒も出土している。上層出土遺物も下層と同様である。上層と下層の間層からはIV～2段階の須恵器が出土している（図119～1180）。

砂質土はT.P.+31～32.3mにあり、層厚0.2～0.5mを測る。中・近世の遺物を含む。

粘土は灰色を呈し、層厚0.2～1.5mを測る。近世の遺物を含む。

上記埋没谷出土の遺物は古墳、飛鳥～奈良時代の各層において、出土層毎にまとめて配置した。遺構図、遺物図のレイアウトは、原則として溝、土坑、落ち込みは調査区のなかでも東の方に位置するトレンチから順に版を組んでいる。以下、遺構の種類別に記述する。

1. 建物（図20・21、表2、写真図版7）

古墳時代の建物はB地区で3棟、C地区で1棟検出された。

各建物の規模その他は表2の通りである。

建物12は1Bトレンチ東側中央部で検出された。建物のPitからはII～3段階の杯身、杯蓋などが少量出土している。他にはI～2段階の古い特徴を持つ甕や高杯脚破片も各1点出土している。土師器は細片のみである。

建物13は1Bトレンチ中央部で検出された。建物のPitからは甕の生焼け細片が1点のみ出土している。

建物32は2Bトレンチ南端で検出された。建物のPit1691からはII～2段階の焼成不良の杯蓋が1点出土しているのみである。

建物45は7Cトレンチ北端で検出された総柱建物である。Pit2893はPit2894を切っているが、Pit2893が建物45に所属する。建物のPitからは遺物が出土していない。

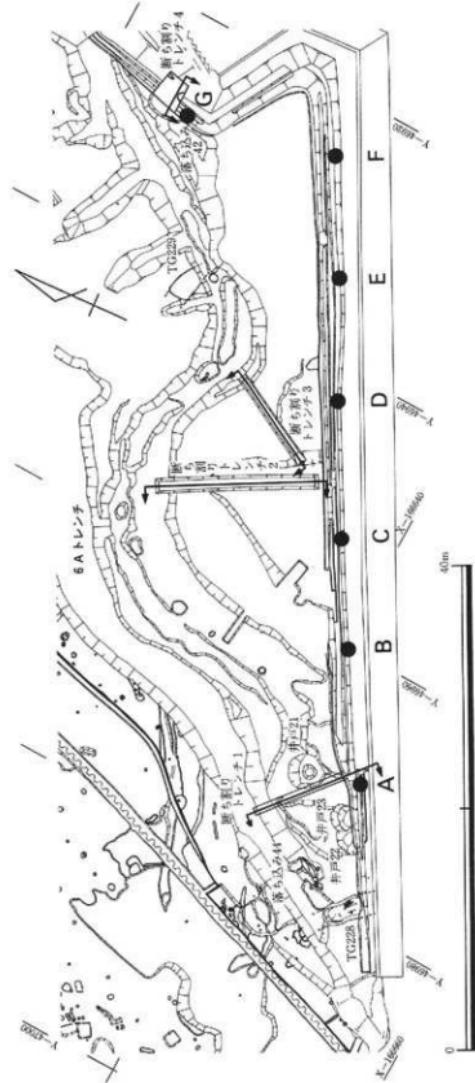


図14 6Aトレンチ遺構図

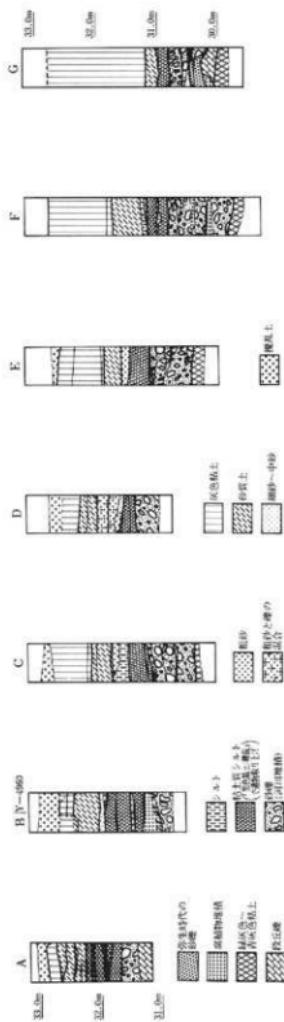


図15 6AトレンチA~G地点土層断面(柱状図)

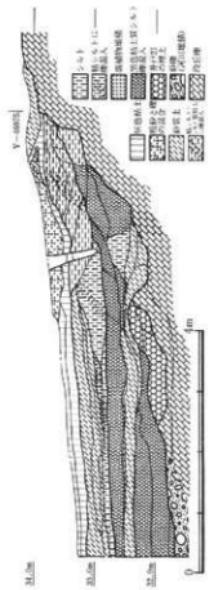


図16 6Aトレンチ断ち割りトレンチ1土層断面

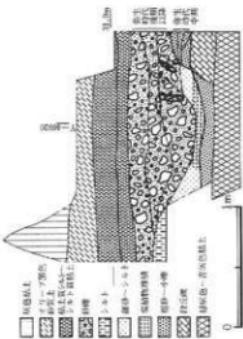


図17 6Aトレンチ断ち割りトレンチ4土層断面



図18 6Aトレンチ断ち割りトレンチ3土層断面

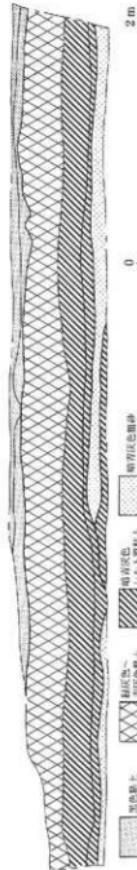


図19 6Aトレンチ断ち割りトレンチ2土層断面

图20 A·B地区 古墳時代遺構図



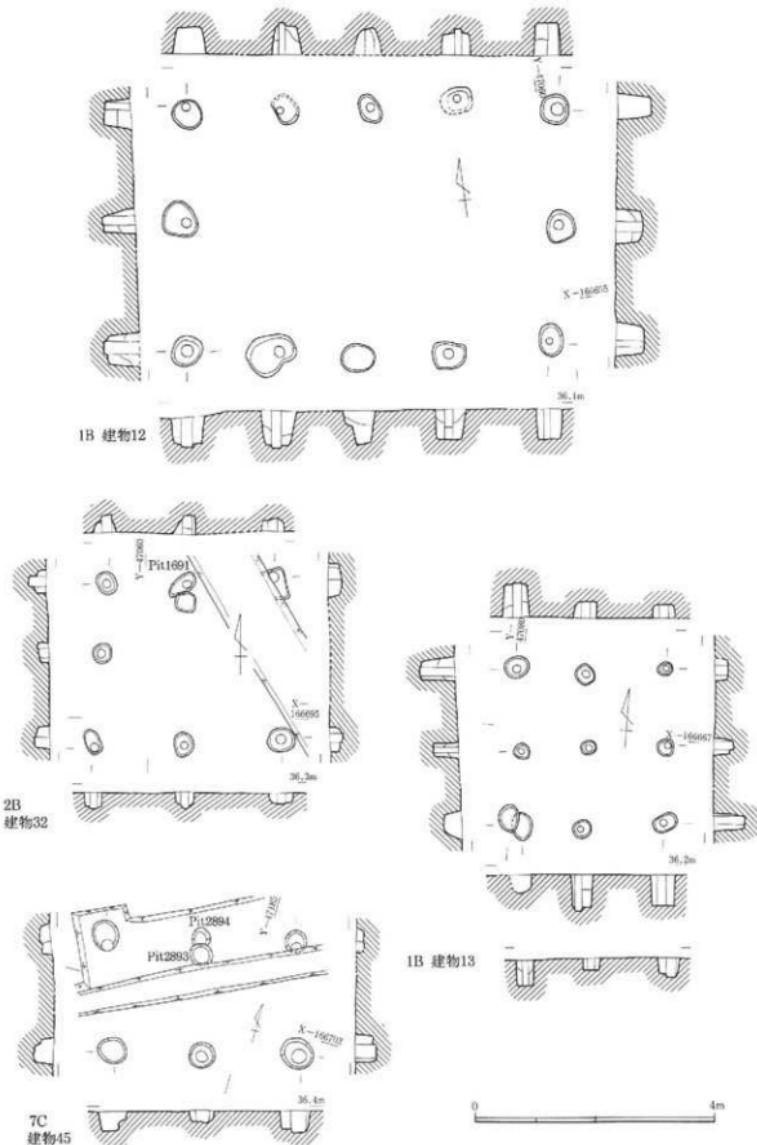


図21 建物12, 13, 32, 45平・断面図およびPit出土遺物

表2 古墳時代建物一覧表

建物名	区画	規模(間数)	方位	柱径(cm)	柱穴径(cm)	深さ(cm)	柱穴平面形	埋土	備考
12 1B	4×2		N-8°-E	北柱薪西～1.54、1.5、1.44、1.7 南柱薪西～1.54、1.4、1.4、1.66 西柱薪北～1.9、2.1 東柱薪北～1.9、1.92	30~80	45~60	円形～椭円形	柱穴：青灰色砂質土のものと黄褐色砂質土のものあり 柱底：褐色系砂質土	柱底直径16~20cm
13 1B	2×2		N-3°-E	北柱薪西～1.16、1.32 南柱薪西～0.96、1.32 西柱薪北～1.36、1.2 東柱薪北～1.28、1.26	22~44	24~60	ほぼ円形	柱穴：灰黄色砂質土 柱底：灰白色砂質土	柱底直径12~14cm
32 2B	2×2		N-2°-E	北柱薪西～1.32、1.44 南柱薪西～1.5、1.6 西柱薪北～1.16、1.64 東柱薪北～2.66	26~54	18~32	円形～椭円形	柱穴：青灰色砂質土 柱底：黄灰色砂質土	柱底直径12~16cm
45 7C	2×(1+)		N-16°-W	北柱薪西～1.53、1.6 南柱薪西～1.53、1.6 西柱薪1.8 東柱薪1.8	35~55	13~36	円形～椭円形	柱穴：青灰色砂質土に 明黄色砂質土が含まれる 柱底：青灰色砂質土	柱底直径20~25cm。 2×2間の縦柱建物の 可能性高い

2. 井戸（図22～24、写真図版8・51～53）

古墳時代の井戸は2基あり、ともに6Aトレーンチ南西端の河川肩部に位置し、段丘裾に近接して築かれた素掘りのものである。

井戸22・23は、飛鳥時代の井戸21の南側に近接して位置しており、同じテラス上に築かれている。また、井戸22・23は隣接し、井戸23は井戸22を壊して築かれている（図23）。

井戸22（図22）の壁面は、すり鉢状を呈し、規模は上端部径2m以上、基底部径約1m、深さ1.15mを測る。埋土は大きく5層に分けられる。上層より(1)灰色～オリーブ黒色粘土質シルト（礫と微砂多く含む）、(2)オリーブ黒色シルト質粘土、(3)オリーブ黒色粘土、(4)オリーブ黒色シルト質粘土～暗オリーブ灰色・オリーブ黒色粘土（青灰色の段丘疊多く混入、腐植物堆積）、(5)オリーブ黒色シルト質粘土と礫の混合層、である。遺物は、(4)層に多く見られる。

出土遺物は口縁部残存の須恵器が計143点あり、I-4～5からII-5～6段階がみられる。そのうち、杯身、杯蓋が約8割を占める。大部分はII-1～4段階であり、残存状態の良いものが多い。それらの器種は杯身、杯蓋、甕、無蓋高杯、甕、小型の平瓶、横瓶、器台破片などであるが、須恵器以外に甕羽口も1点みられる（63）。45、46の杯蓋天井部内面には当て具痕がみられる。61の甕は焼成不良である。60の小型平瓶は口縁部が一部欠損しており、肩部に円形浮文2個と細い円形竹管文が3個1単位で4ヶ所に施されている。須恵器ではヘラ記号のついた土器が8点出土している。記号は3種類で、「フ」状が4点、「一」が2点（52）、「キ」の横棒の間隔が広くて縦棒の短い記号が2点出土している。その他に図化していないが、III型式の高杯と杯蓋を各1点ずつ含み、混入かと思われるものである。

井戸23（図24）は上端部径約2m以上、基底部径約1m、深さ0.93mを測り、平面形は、不整な円形を呈している。埋土は5層に大別できる。上層より(1)灰色粘土質シルト～暗オリーブ灰色粘微砂、(2)緑灰色粗砂・疊～青灰色粗砂・細砂、(3)オリーブ黒色粘シルト（礫・微砂混入）、(4)黒褐色粘土（腐植物堆積）、(5)オリーブ黒色粘土である。遺物は(5)層に多く見られる。

出土遺物は井戸22と同じ様な時期のものが見られ、残存状態の良いものが多い。須恵器は口縁部が残存するものが計117点あり、そのうち杯身、杯蓋が約8割弱を占める。須恵器の時期はI-3～4段階からII-6段階までのものがみられる。I-3～4段階の杯身、杯蓋を少し含むが、大部分はII-3～4の段階のものである。それらの器種は杯身、杯蓋、無蓋高杯、短頸甕、提瓶、甕、横瓶、瓶底、甕等である。II-5～6段階の杯身、無蓋高杯は各1点出土している。この他、III段階の土器も2点（杯身、無蓋高杯）みられるが、これは井戸22と同じく混入によるものか。須恵器ではヘラ記号のついた杯身、杯蓋、甕が合計14点認められた。ヘラ記号については別の項でも述べるが、井戸23出土のヘラ記号にお

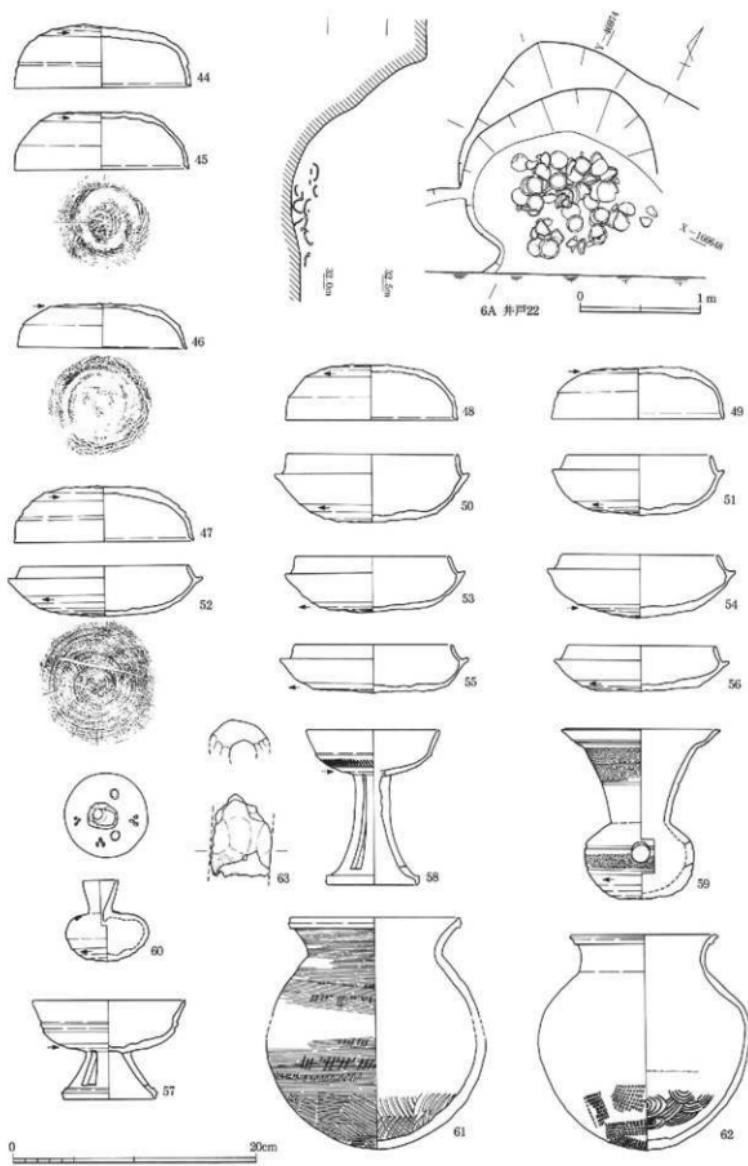


図22 井戸22平・断面図および出土遺物

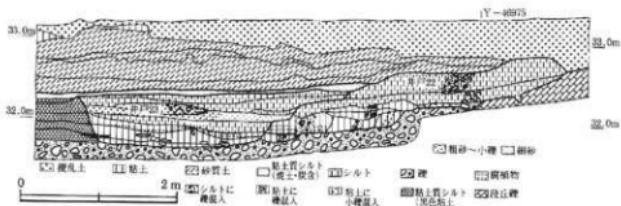


図23 井戸22・23土層断面図

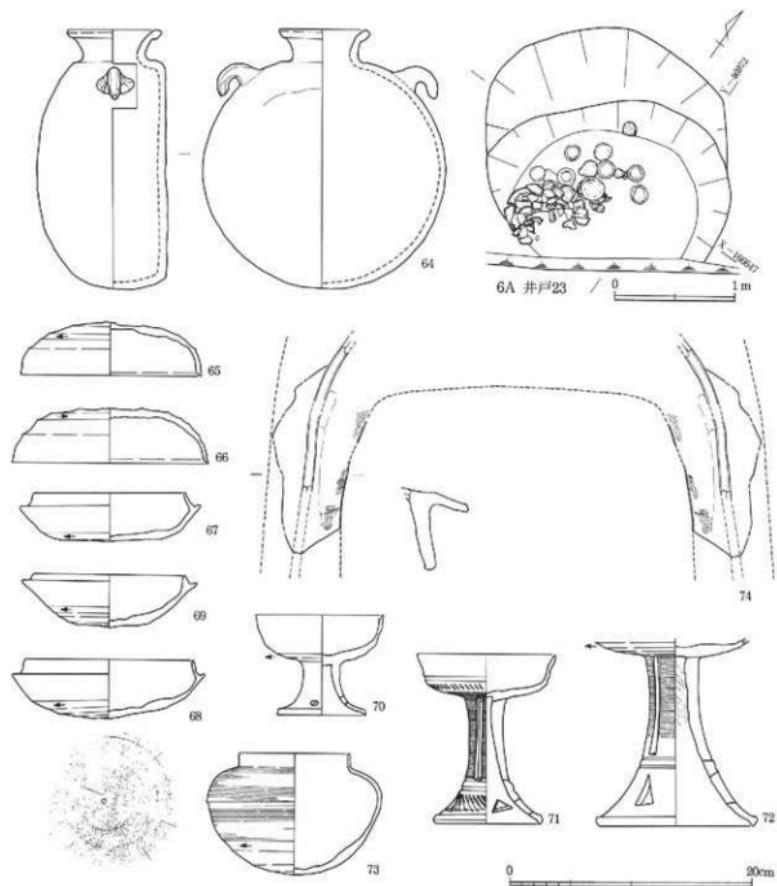


図24 井戸23平面図および出土遺物

いては完全な形で記号が残っていると思われるものは7種類あり、「キ」は横棒の間隔を度外視すれば計4点、「一」、「×」は各2点みられる。68の杯身底部外面には「一」のヘラ記号がみられる。須恵器以外では、土師器の壺片（写真図版106-74）1点や、甕の破片2点がみられた。

3. 溝（図25～31、写真図版8・9・53～58）

溝はA、B地区にみられる（図20）。溝は切り合い関係に関係無く、出土遺物に古墳時代のものだけが認められた場合、遺物の掲載および説明はこの古墳時代の節で行っている。以下、挿図掲載の遺構から順に記述する。

溝58・59・60・64は2Aトレンチの西端寄りで隣接し、溝58・59・60はほぼ東西方向からトレンチ端において北方向に湾曲する。溝58・60の埋土は褐灰色砂質土である。溝58は溝57・59に切られている。溝64は溝57・58を切る新しい溝である。

溝59からはII-2～5の段階のうち、主にII-2～3に属する須恵器が少量出土している。それらは杯身、杯蓋、無蓋高杯、壺（75）、甕である。75の壺は短く外反する口縁部をもち、焼成はやや不良である。また、不定形刃器が1点（図12-28）出土している。

溝58からはII-2～3段階の須恵器が少量出土している。それらは杯身（76）、杯蓋、横瓶？、短頸壺、甕（77）である。

溝60からはII-2～4段階の須恵器が少量出土している（写真図版53）。それらは杯身（82、83）、杯蓋、短頸壺（84）、甕（85）である。85は口縁部外面に平行叩き目痕跡を留め、頸部に太い沈線1条の波状文を施している。85の甕体部破損部分は摩って再加工を施している。

溝64出土遺物で図化したのは78～81である（写真図版53）。脚台の欠損した椀状のものが1点（80）あり、体部外面にはカキ目が施されている。溝64出土遺物はII-2～4段階の杯身（79）、杯蓋（78）が多く、他にII-4～6の甕1点（81）、II-6かと思われる杯蓋と、軟質の壺の細片が各1点みられる。

溝31は1Bトレンチ南端の溝8の東側に重複して検出された。深さ約10cmを測り、埋土はにぶい黄橙色砂質土である。出土遺物はI-5からII-6までの段階のうち、II-2～4段階のものが大半を占める。86・87の杯蓋は稜が退化し、削りの範囲も狭い。II-5～6段階にあたる。88の杯身は立ち上がりが退化し、内傾しておりII-6段階に属する。89の甕は口縁から頸にかけて櫛描波状文と沈線文により装飾を施しており、I-5～II-1段階に属すると思われる。90は浅めの鉢の形態をした口縁部で、器台の鉢部の破片か。体部から口縁部にかけてやや内湾して立ち上がり、口縁端部は内傾したほぼ平坦な面をなす。調整は体部下半を回転ヘラ削り、上半は回転ナデを施している。II-4段階前後と思われる。

溝6は1Bトレンチ北西隅で、溝148の西側で検出されており、ほぼ南北方向に流れている。長さ約15m、深さ約25cmを測り、埋土は黄灰色砂質土である。出土遺物はII-2～5のうち主にII-2～4の段階の須恵器が多い（91～96、写真図版53）。91～93は杯蓋、94は杯身、95は小型の壺、96は甕である。92の杯蓋内面に当て具痕が残る。93の杯蓋外面には「フ」状のヘラ記号がみられる。そのほか溝6からは、N型式の須恵器細片が2点（杯蓋、皿）と瓦器碗も出土しているが、混入と思われる。

溝29は1Bトレンチ西端寄りにあり、1Bから3Bトレンチにかけて緩やかに蛇行しながら南北方向に流れる溝8に切られている。溝29からは97～112にみるような須恵器の口縁部が残存するもので約100点出土した（写真図版54・55）。時期はI-3～4からII-5～6段階のものがみられ、その中でもII-2～4段階のものが最も多く認められた。須恵器の器種では杯身、杯蓋が9割強と大部分を占め、土師器は甕片が数点出土したのみである。97は杯蓋、98～104は杯身、105は杯蓋、106は短頸壺、107は甕、

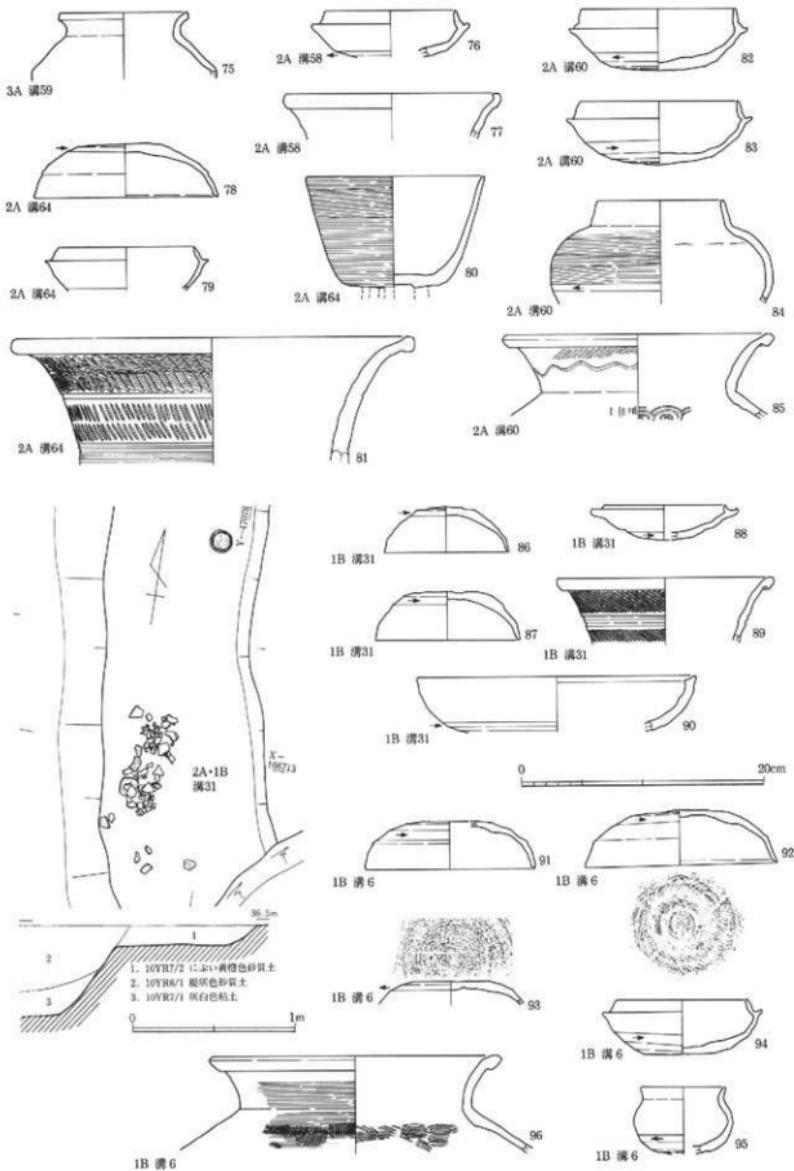


図25 溝31平・断面図および3A, 2A, 1B トレンチ溝出土遺物

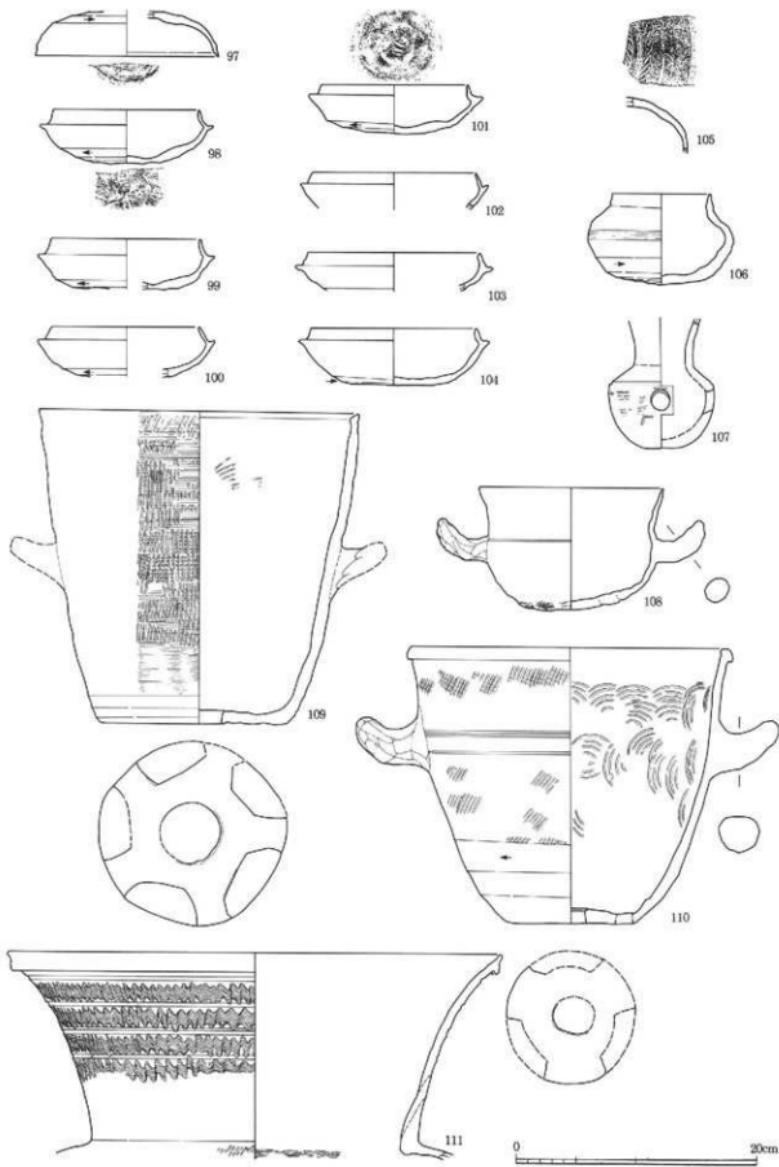


图26 溝29出土遗物

108は双把手付き鉢かと思われるもの、109、110は瓶、111、112は甕である。97の杯蓋内面および101の杯身内面には当て具痕が残る。98の杯身底部外面には「フ」状のヘラ記号がみられる。105の外面は櫛描列点文2帯および沈線1条により施されている。107は口縁部の欠損した甕で、頸部はやや太く、体部は丸みをもつ。体部に1条の沈線が施され、外面調整はナデられている。108は把手が1つのみ残る破片であるが、双把手付きの鉢か。108の時期は不明である。109、110は2点ともに内面調整にナデがみられる。110の焼成はやや不良で、軟質である。111は口縁端部が四角く、端部直下の外面に凸帯を1条巡らせ、波状文と沈線を交互に配している。I-3～4段階のものと思われる。112の口縁部はややなだらかな肩部から短く外反し、口縁端部は外面に帶状に肥厚させ、断面四角形状を呈する。体部外面に平行叩き後カキ目、内面に同心円叩きを施し、頸部外面には僅かにカキ目が見られる。外面の口縁部、肩部に僅かに灰を被っている。図化したものは、先に述べた時期以外のものについては、II-2～4段階に属すると思われるものである。このほかIV型式の須恵器が細片で2点（杯蓋、高台）みられたが、混入と思われる。

溝4は1Bトレンチ建物12のPitと切り合ひ、建物12よりも古い。溝4出土遺物はI-5～II-6段階のうち、II-2～4段階の須恵器破片が少し多いが、II-5～6段階にあたる杯身（113）・高杯（114）もみられる。115は凝灰岩製の砥石である。もろい材質で、上下両端が欠損しているが、側面は4面ともに使用されている（写真図版56）。

図27掲載遺物の出土遺構である溝は1Bトレンチの南側にかたまっている。溝は南北方向のもので東から溝26、8、27であり、溝27は溝8に切られている。

溝8（写真図版8）は1Bから3Bトレンチにかけて検出された。長さ65m以上、深さ約0.6mを測り、北側30mはN-26°-Eの方位を示し、深さは25cmである。埋土は褐色砂質土である。出土遺物は須恵器の口縁部破片が128点と多い。土師器は甕口縁部細片が2点のみである。時期はI-5～II-6のうち、主にII-2～4段階の須恵器が多く出土している。須恵器は杯身、杯蓋が約7割弱、甕が約2割弱、残りが無蓋高杯、高杯蓋、短頸壺、すり鉢、甕、瓶、器台などの器種である。杯蓋（120）はII-3～4、杯身（122）はII-3～4段階、杯身（121、123）はII-5～6段階に属する。他にIII～IV段階の須恵器の杯身、杯蓋、脚台破片が計数点混入してみられる。

1Bトレンチにおいて、東西方向の溝は北から溝10、3、12、13、35、34、30である。

溝10は建物12より先行する溝4の延長線上にあり、トレンチ西端へ延びる。溝10出土遺物はII-2～4の杯蓋（116）2点、無蓋高杯1点、甕頸片1点、甕体部片などが少量ある。

溝3は溝7に切られている。溝3出土遺物はII-2かと思われる杯蓋1点（117）、壺？1点（118）、甕体部片がある。118の調整は外内面ともに回転ナデを施し、頸部から肩にかけての内面には粘土紐の繼ぎ目を残す。

溝12、13は溝29、8と切り合っており、溝29、8よりも新しいが、II-2～4の須恵器が少量出土しているため遺物実測図を掲載した（125～127）。125は稜が沈線で表現された杯蓋、126はつまみの上部が凹み、稜が殆ど退化し、かすかに角ばっている（写真図版56）。125、126とともに溝12出土で、II-2段階に属する。127は溝13出土で、口径がやや大きく、立ち上がりが内傾し、端部は丸く收める。II-2段階にあたる。

溝26は1Bから2Bにかけて約10mほぼ南北方向にのびる細い溝である。II-2段階の杯蓋（119）2点と杯身1点、甕体部片が少量出土している。

溝27は1Bトレンチで検出された。溝29の北側へ延長したように見える長さ6.2m、幅0.3~1.3m、深さ15~20cmの溝である。溝27は溝29とともに溝8によって切られている。溝27の出土遺物は須恵器ではII-1~4段階の杯身9点、杯蓋7点、有蓋高杯1点、甕1点が、土師器では把手破片1点、体部破片が出土している。130~133はII-3~4段階の杯身である（写真図版56）。134はII-2~3段階と思われる有蓋高杯で、脚部に円形の透かし孔が2ヵ所に開けられている。134の脚裾部は欠損し、杯底部にはひび割れが見られる。

溝30は1Bトレンチ南端に位置する、ほぼ東西方向に走る残存長4.7m、幅0.6~1.2m、深さ約0.1mの落ち込み6を切る溝である。出土遺物は須恵器ではII-1~4段階の杯身6点（128）、杯蓋7点、甕1点、脚破片1点、土師器では甕1点がある。

溝34・35は1Bトレンチ中央部を東西に走る。溝34は長さ4.8m、幅0.3~1.4m、深さ5~9cmの溝である。溝35は長さ6.8m、幅0.3~0.5m、深さ2~6cmの溝である。溝35は溝1によって切られている。溝34からはII-2~4段階の杯身1点、杯蓋2点、甕1点、不明1点、土師器甕体部片が1点出土している。129の杯身は口縁部に杯蓋の溶着痕跡を残す。溝35からはI-3~5段階の杯蓋2点、II-2段階の杯蓋（124）が3点出土している。

溝19（写真図版8）は1Bトレンチで検出。建物12の東側に南北方向にのび、建物12に先行する溝4に切られている。切り合い関係からすれば溝19→溝4→建物12となり、時期が異なる。溝19は1B・2BトレンチにかけてN-11°-Eの軸をもち、30m以上のがる。断面は腕形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質土である。

遺物は溝全体から間断なく出土しており、I-3~II-6段階の須恵器が255点、土師器が14点ある（写真図版56・57）。須恵器ではI-4~II-2段階のものが多く、杯身（144~154）、杯蓋（135~143）が約8割強占める。他には有蓋高杯（157）、無蓋高杯、甕、高杯蓋（155、156）、短頸壺（159、160）、瓶、榎（162）などがみられる。156、157は大型の蓋、有蓋高杯でI-5~II-1段階と思われるものである。156はつまみ上面が凹み、ヘラ削りが稜部まで及び、口縁端部は僅かに内傾した平坦面をなす。天井部内面に直径4.5cmの当具痕を多く留める。157は体部外面に擬格子叩きが一部残存する。外面の受け部直下と脚部に灰を被る。158は短頸壺の蓋と思われるものである。159、160は短頸壺で、160は短頸壺の口縁の一部を切り取って注ぎ口としたものである。161は土師器の小型丸底壺を模したかのような形態の須恵器の小壺である。161の底部は回転ヘラ切りで一部ナデがみられるが未調整で、口縁部から体部は回転ナデである。外面口縁部の一部と内面に灰を被る。162は把手付き榎が剥がれたものである。体部に焼成時の別個体破片が溶着している。163は焼成がやや不良の底部剥落したすり鉢である。164、165は土師器の甕である。164の外面調整は縦方向のハケ目である。165は表面が剥落して詳細は不明だが、ナデ調整が施され、頸部から体部にかけての内面には粘土紐の接合痕を留める。166は緑色片岩製の石庖丁を転用したかと思われる、隅円三角形状の扁平な石器である。中央に1ヵ所小さく穿孔されている。これらの他に、細片ではあるが、弥生中期・後期の壺口縁部破片が各1点みられた。

溝19は切り合い関係からは矛盾するが、建物12と軸がほぼ同じであり、溝を境に西側にPitが集中し、東側にPitが疎らにある。また、Pit集中場所より西側の溝6~8、29、110、148を境に古墳時代の遺構が疎らとなり、4Bトレンチで検出された河川1に連なる谷地形が認められ、区画溝としての機能が考えられている。さらに、Pit集中場所より南側の溝113を境にして、遺構は疎らとなっている。

溝92（写真図版9）は2Bトレンチのはば南北方向に短くのがる溝で、東西にのがる溝101を切る。深

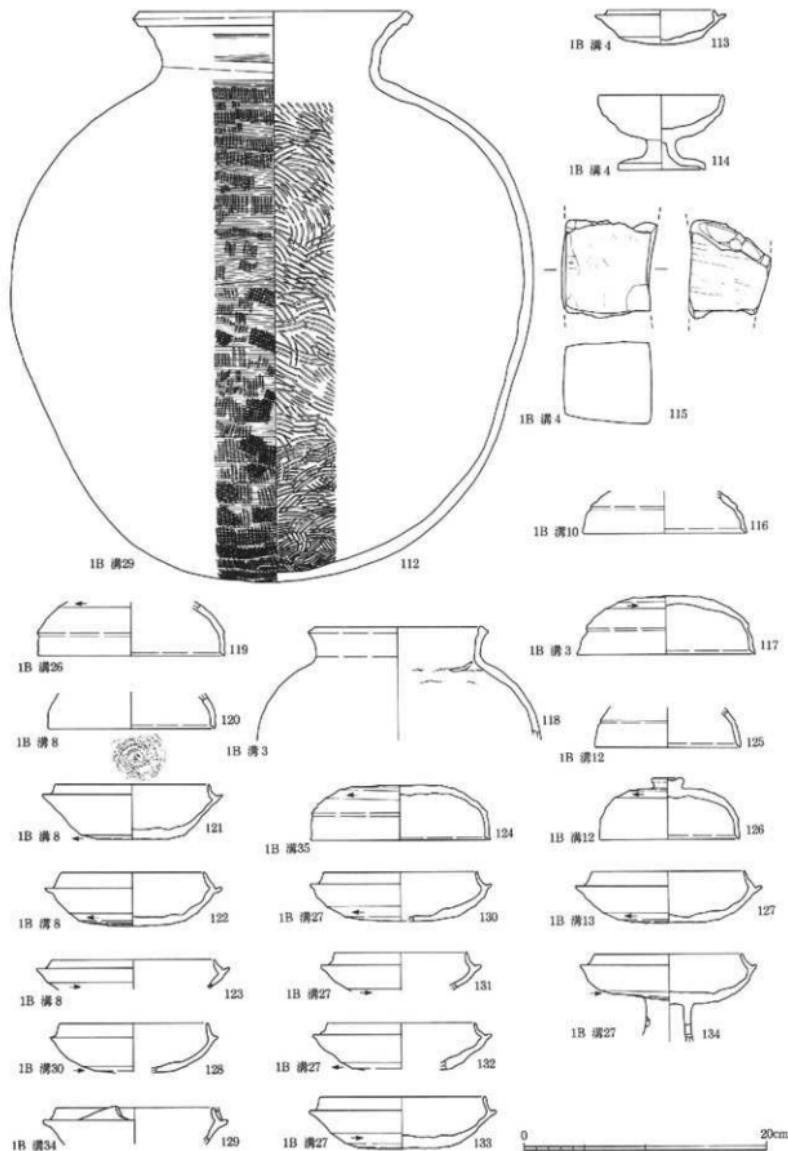


図27 1B トレンチ溝出土遺物

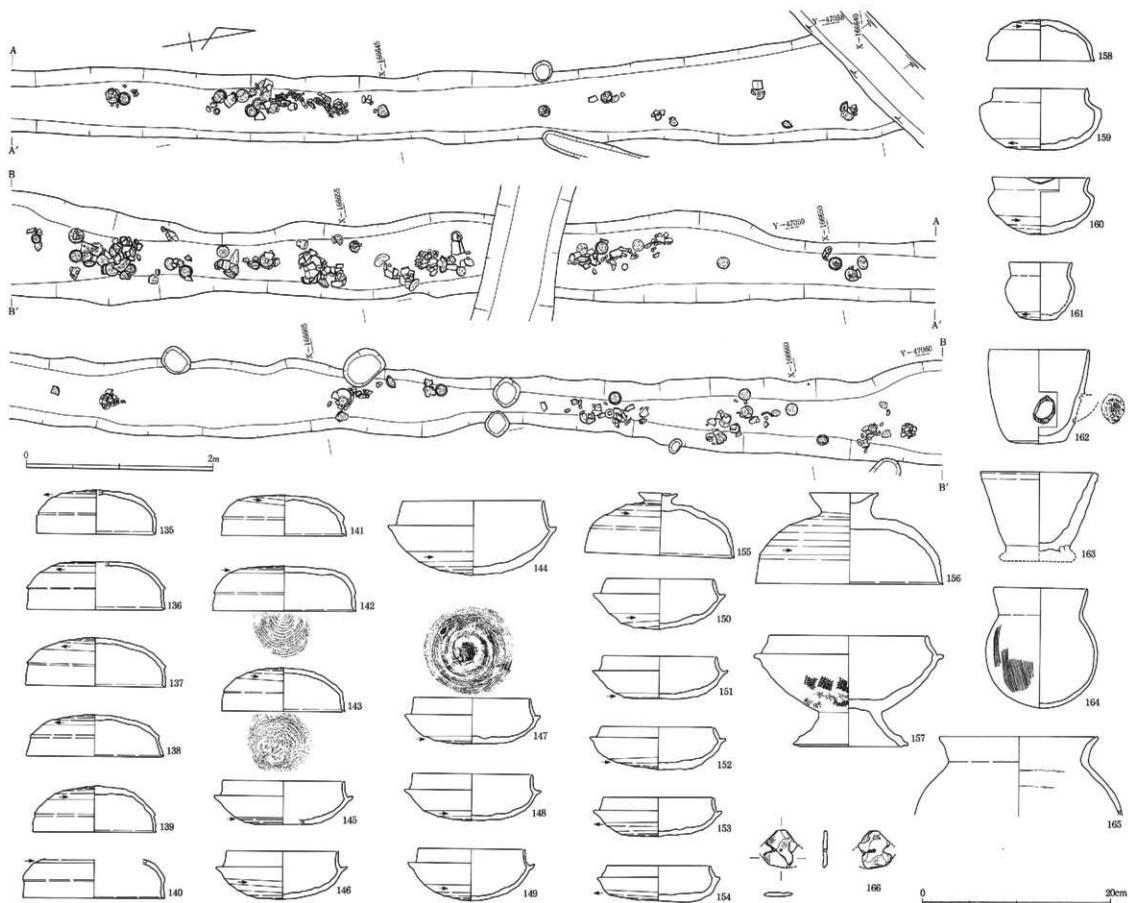


図28 满19平面図および出土遺物

さは0.1~0.3mを測り、埋土は褐灰色砂質土である。出土遺物はI-5段階の杯身、杯蓋、甕合計6点と、II-4~5段階の杯身(167)、杯蓋を含む合計51点の他、甕、甕、瓶などを含む。須恵器はII-3~5段階のものが最も多い。土師器の甕は1点ある。

溝113(写真図版9)は2Bトレンチで検出。溝19とはほぼ直角に曲がる溝114の延長線上にあり、ほぼ東西に短く走る。全長5.3m、幅0.5~0.7m、深さ0.1~0.2mである。溝113は南北方向に長くのびる溝5と、幅狭く短い溝26によって切られている。出土遺物はI-5~II-4段階の杯身、杯蓋、無蓋高杯、短頸壺、鉢、甕、脚や甕などの須恵器が少々と、土師器の甕が1点出土している。168の杯身はI-5~II-1段階に属するものである(写真図版58)。

溝5は1Bから2Bトレンチにかけて北西-南東方向に約60m以上延びる。出土遺物はII-1~5段階の主に須恵器の杯身、杯蓋、少しの甕がみられる。

溝101(写真図版9)は2Bトレンチ中央付近を東西にE-約4°-Sの方位で溝96と平行に走る溝である。長さ13m、幅1.7~0.7m、深さ0.1~0.3mを測り、東端部分では幅0.3mと細くなる。また、溝101は西へ溝114・113と断続的に連なるものであり、落ち込み10も一連のものと考えられる。出土遺物の時期は古いものではI-3~5段階であり、新しくはII-5~6であるが、出土量の多いのはII-1~2である。須恵器の器種は多量の杯身、杯蓋以外に、少量の甕、壺、器台破片がみられる。須恵器以外では土師器の甕が2点と鉄滓破片が1点、他に、混入と思われる奈良時代の土釜錫片が1点みられる。177はII-3~4段階の杯身である。

溝114は2Bトレンチで検出。溝19の南端に東西方向で短くあり、溝19を切るような位置にある。出土遺物はII-1~2の杯身、杯蓋が少量出ている。169は稜部が沈線で表現され、天井部内面に当て具痕を留める。II-2段階のものである。

溝93は2Bトレンチで検出。東西方向にのびる溝101と平行する溝96に切られた、南北方向に8.3m、幅0.3~1m、深さ0.1~0.3mを測る溝である。出土遺物は少量で、I-5段階が4点、II-1~2段階が5点である。1点のみII-3~4の提瓶かと思われる破片がある。178(写真図版58)は杯蓋、179は無蓋高杯でともにII-1~2段階のものである。

溝191・192・193は2Bトレンチ南端寄りにあり、溝191と溝193がほぼ平行して北東-南西方向で、溝193は東側ではほぼ直角に曲がる。溝192はおよそ東西の方位を示し、トレンチ外へ続く。溝191・193の溝1との切り合い関係は不明である。溝191~193は須恵器が少量出土しており、II-1~4段階のものが多い。

溝191からはI-4~5からII-3~4段階の須恵器が少々出土している。器種は杯身、杯蓋、甕、細頸壺(長頸壺?)、脚部破片がある。180はI-5~II-1段階の杯蓋、181はII-2~3段階の杯身である。

溝193からはII-1~5段階の須恵器が少々出土しており、器種は杯身、杯蓋、高杯蓋、甕、器台脚片、壺か不明の脚片がみられる。他に、土師器の甕頸部を含む破片が少し出土している。182、183は杯蓋、184、185は杯身で、ともにII-1~2段階のものである。

溝103は2Bトレンチで検出。II-2~4段階の須恵器杯身、杯蓋、有蓋高杯(186)が各1点と、鉢2点、不明1点が出土している。186は脚部が欠損した有蓋高杯で、3方向に透かしを有する。受け部には蓋の重ね焼き痕を留め、杯部外面には灰を被る。

溝111は2Bトレンチで検出。溝111・92・100・43・190は断続的に南北方向に大きく蛇行しながら幅

0.6~1.0mで約60m以上延びる。このうち、溝92出土遺物は先述の通りであるが、溝100は飛鳥~奈良時代の項で説明している。溝111は深さ0.1~0.2mを測り、埋土は褐色砂質土である。出土遺物はII-2~4とII-5~6段階の須恵器杯身、杯蓋を数点と、甕1点、土師器細片などが出土している。187はII-2~4段階の杯身である。

溝207は2Bトレンチで検出。II-2~4段階の杯身が1点(188)出土している。

溝192は2Bトレンチで検出。II-1~2段階の杯身、杯蓋、II-3~4段階の杯身が数点と、甕1点、器台脚片2点などが出土している。189はII-3~4段階の杯身である。外面には灰を被っている。

溝204、206は2Bトレンチで検出され、ほぼ南北方向に短くのびる。両方ともに少量の遺物が出土している。191は溝204出土の土師器の把手破片である。このほか、溝204からはII-1~4段階の須恵器が少量出土している。器種は杯身、杯蓋、甕がみられる。190は溝206出土の杯身でII-4~5段階のものである。溝206からは他に甕体部細片が2点出土している。

溝17は2Bトレンチで検出。II-2段階の杯蓋細片が数点と、II-3~4段階の杯身、杯蓋が数点、甕1点、瓶生焼け細片2点、脚破片1点とII-4~5段階の杯身、杯蓋が数点と、土師器細片1点などが出でている。II-3~4段階の杯蓋には「×」の、蓋か杯不明には「-」と「キ」のヘラ記号が各1点ずつ認められた。193は外面に灰を被り、杯部に少し歪みのあるII-4~5段階の杯身である。192は短く外反する口頸部の甕で、口縁端部は外面に丸みをもって肥厚する。II-3~4段階のものか。

溝7は1Bから3Bトレンチにかけて検出。N-26°-Eの方位を有し、長さ23m以上、深さは北側が約0.4m、南側が約0.2mを測る。埋土は黄灰色砂質土である。溝の切り合ひ関係より溝6→7→8の先后関係が認められる。出土遺物はII-1~6段階の須恵器が少々出土している。194は杯蓋で、外面に灰を被っている。II-3~4段階。195は杯身で、II-4~5段階。196は平瓶の口縁部破片で、内面には製作時の口縁部を円板で蓋をした痕跡と、外面にカキ目がみられる。II-4~6段階のものか。197は頸部がやや歪んだ横瓶の口縁部破片で、外面は平行叩き、内面は同心円叩きである。頸部に「フ」字状のヘラ記号を有する。II-4~6段階のものか(写真図版58)。198~200は甕である。198は頸部が無文で、199、200は頸部外面に波状文を施している。200は頸部内面に粘土紐の雜ざ目を残し、頸部下端部は粘土接合部で剥がれている。3点ともにII-4~6段階のものか。

溝164は3Bトレンチで検出。溝6~8・29・110・148といった区画溝の西側に平行する短い土坑状を呈する溝である。須恵器の灰を被ったII-2段階の杯蓋が1点(201)と甕体部細片3点、土師器の体部細片が1点出土している。

溝165は3Bトレンチで検出。II-1~6段階かと思われる須恵器が若干と土師器甕細片が2点出土している。内訳はII-1~2段階の杯身18点、杯蓋28点、無蓋高杯2点、II-3~4段階の杯身が4点、このほか、II型式に属するとと思われる壺蓋1点、甕3点、瓶1点、器台破片1点、脚部破片2点、平瓶1点などがみられる。202は杯蓋で、稜部が突出し、口縁端部は接地部分が極僅かに欠損しているが、段状を呈する。外面には灰を被っている。

溝150は3Bトレンチで検出。I-5~II-4段階の須恵器が少々出土し、そのうち、II-1~2段階の杯身、杯蓋が多い。内訳はI-5段階の杯身3点、II-1~2段階の杯身5点、杯蓋21点、無蓋高杯1点、高杯脚部破片2点、II-3~4段階の杯身4点、短頸壺1点、甕6点、碗か不明1点などが出土している。203は外面に灰を被ったII-1~2段階の杯身である(写真図版58)。

溝148は3Bトレンチで、溝8の東側に重複して検出された。深さは0.1~0.2mと浅い。出土遺物は1

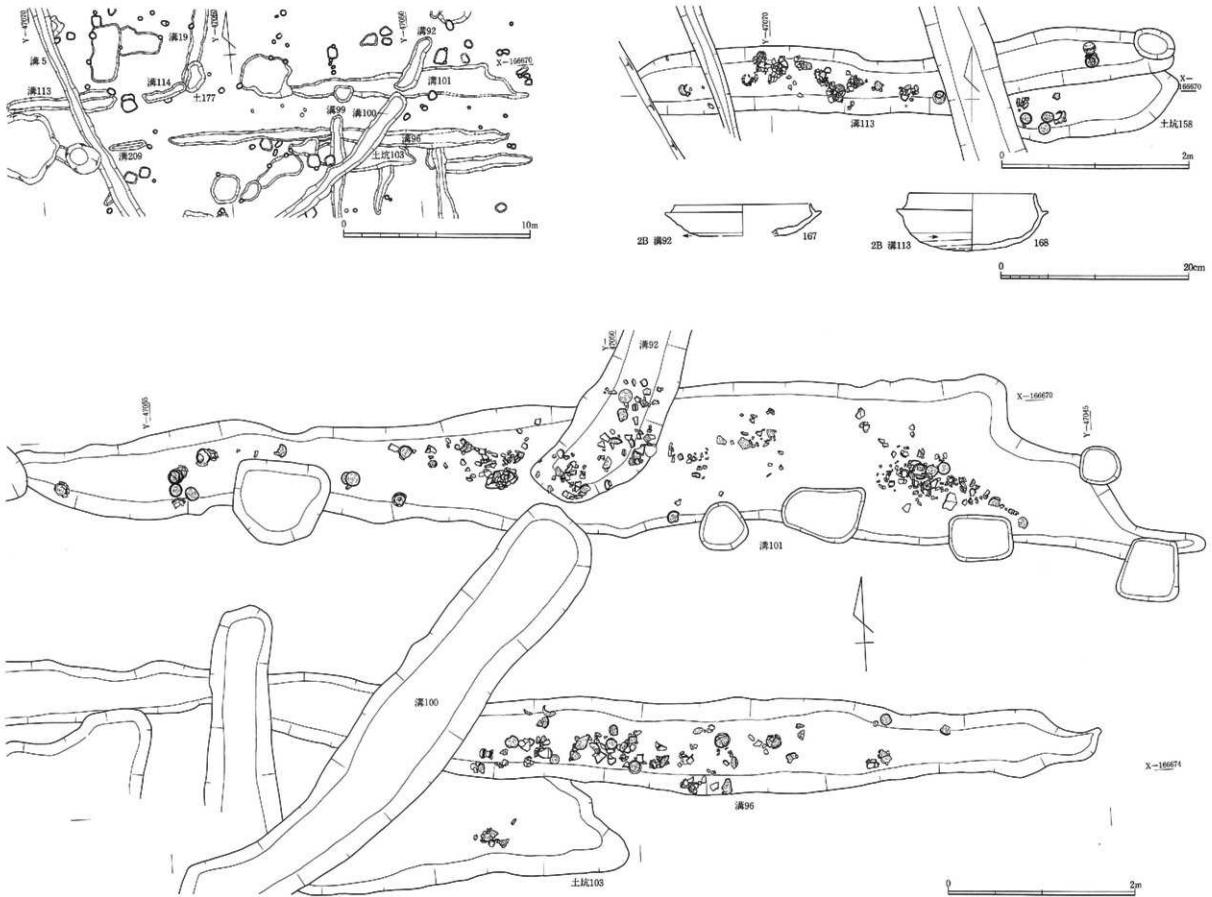


図29 2Bトレンチ溝平面図および出土遺物

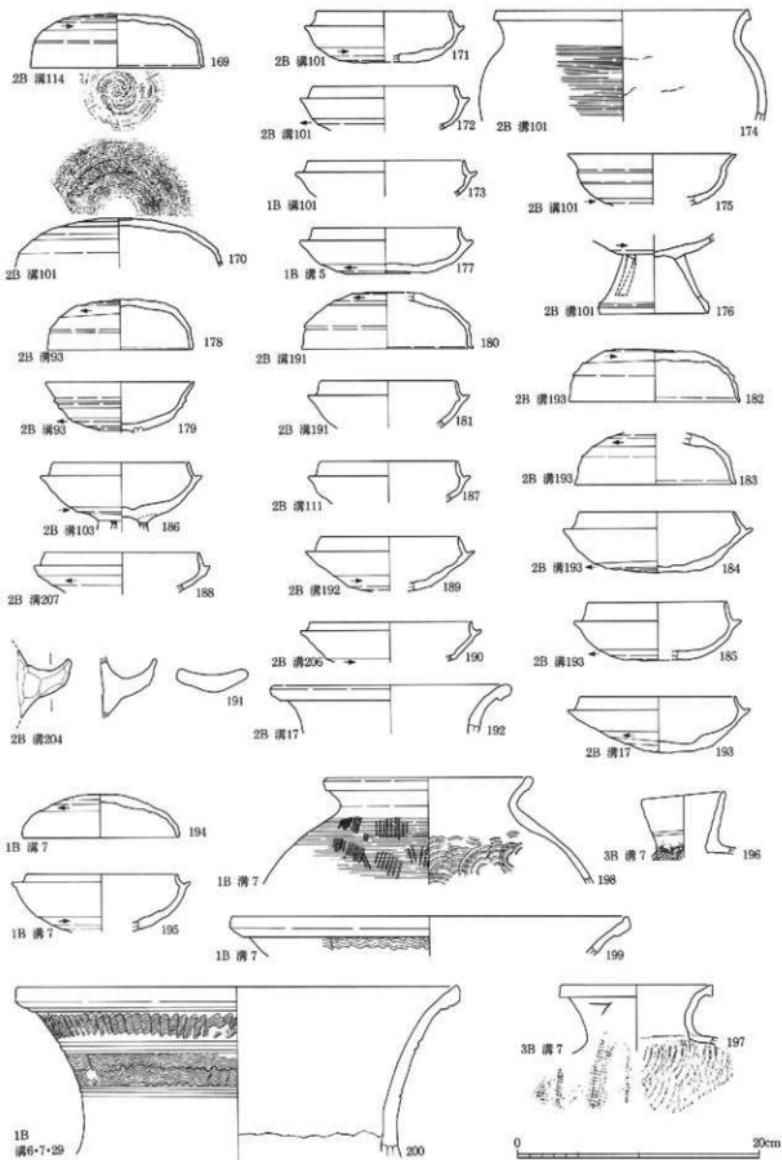


図30 2B,1B,3B トレンチ溝出土遺物

— 5 から II - 2 段階の須恵器が数点と、土師器壺 1 点である。204は II - 1 ~ 2 段階の杯身である。

溝131は3B トレンチで検出。I - 3 から II - 3 ~ 4 段階の須恵器が少々出土している。I - 3 の杯身が 1 点、I - 4 ~ 5 が杯身 3 点、杯蓋 3 点、II - 1 ~ 2 の杯蓋が 2 点、II - 3 ~ 4 の杯身が 1 点、そのほか、甕、瓶、高杯脚部、不明口縁が各 1 点などみられる。205はやや口径の小さめの I - 4 ~ 5 段階の杯身である。

溝182は3B トレンチで検出。II - 2 ~ 3 段階の杯身 1 点 (206)、短頸壺 1 点 (207)、杯か蓋不明 1 点が出土している。207は器高の割りに口縁部の立ち上がりが高いものである。体部下方から底部にかけて、回転ヘラ削りが施されている (写真図版58)。

3B トレンチの溝110、165、166、148、150は区画溝と切り合ってほぼ平行に南北方向にのびる溝であ

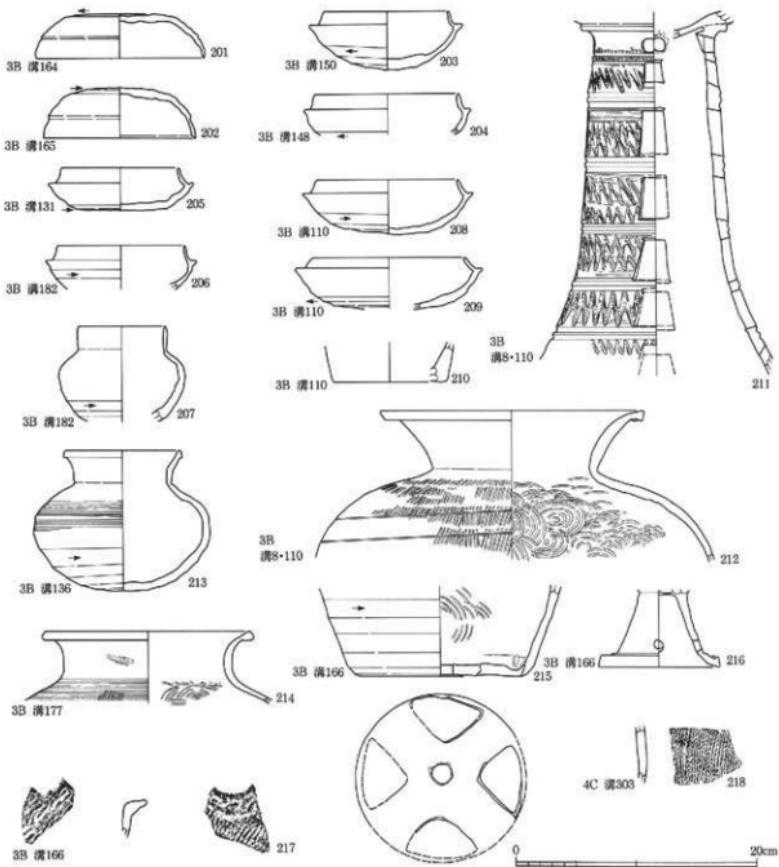


図31 3B, 4C トレンチ溝出土遺物

る。

溝110（写真図版8）は溝8の東側で検出されており、長さ30m以上、幅1～2.5m、深さ0.2～0.3mを測り、南側8mにおいては幅80cmと細くなる。切り合い関係より溝29→110→8の先後関係が認められる。溝110からはII-3～4段階が中心の多量の須恵器が出土しており、その大部分は杯身、杯蓋によって占められる。古くはI-4～5段階のものが少量、新しくはII-5～6段階がわずかにみられる。208、209はII-2～4段階の杯身、器台脚部（211）と壺（写真図版58-212）は溝8と溝110出土の破片が接合したものである。それら以外に溝110からは縦羽口の細片1点、弥生土器の底部と思われるものが1点（210）、埴輪の細片かと思われるものが2点みられた。

溝136は3Bトレンチで検出。II-2段階の杯蓋が2点、II型式と思われる壺1点（写真図版58-213）、「一」のヘラ記号のついた杯身破片1点が出土している。

溝177は3Bトレンチで検出。須恵器が数点出土している。II型式の杯か蓋か不明が1点、脚破片が2点、壺1点（214）である。214は短く外反する口縁部に口縁端部は外方にやや丸みをもって肥厚する。調整は外面が平行叩きのちカキ目、内面が同心円叩きである。

溝166は3Bトレンチで検出。I-5段階と思われるものからII-4段階までの須恵器が少々出土している。内訳はI-5かと思われる脚破片1点、II-1～2の杯身が6点、杯蓋が15点、無蓋高杯が2点、高杯蓋が1点、脚部破片が2点、II-3～4の杯身が4点、杯蓋が3点、壺が1点、脚部破片が2点、土器類細片などである。215は壺の底部で、底部外面に扇形の透かしが4ヵ所、中央に小さい円形透かしが1ヵ所みられる。調整は体部外面は回転ヘラ削り、内面は同心円叩きである。時期は不明である。216は高杯と思われるものの脚部で、短脚の4方に円形の透かしが穿たれている。I-5段階のものか。217は片口付きの不明破片で、体部外面に平行叩き、内面に同心円叩きがみられる。時期は不明である。

溝303は4Cトレンチで検出された近世溝であるが、ここからは繩席文の細片が1点（218）出土している。

4. 土坑（図32～41、写真図版11～14・31・59～65・77）

土坑はII～IV型式の時期のものが、AからC地区にかけて密集しており、時期を特定することは溝と同じく困難であった。ここで古墳時代の土坑としたものは、須恵器の杯蓋に返りのついていないものが出土しているものに限る。また、C地区にみられた土坑は出土遺物により、古墳時代後期から奈良時代の時期幅をもつものであるが、長い間にわたって同一の性格の遺構が構築されたものと考えられ、飛鳥・奈良時代の項において述べた。

土坑81（図32・33、写真図版11・59）は3Aトレンチ西隅で検出されており、長軸約3.5m、短軸約2.6m、深さ約0.1mを測る隅円方形の平面をもつ。土坑81は奈良時代の道路状遺構の溝である溝87によって切られている。遺物はII-6段階の時期に属する。杯身（220、221）、杯蓋（219）、高杯脚、壺、甕、器台、提瓶（222、228）などが少量みられる。228の提瓶体部中央には粗圧痕がみられる。約10m弱離れた位置にある土坑161出土破片との接合例（224）や、約20m離れた位置の溝57出土破片との接合例（223）がある。

土坑77（図32）は3Aトレンチで検出。遺物はII-3～5段階の杯身4点、杯蓋4点、II-1段階かと思われる高杯脚部（227）、壺、甕の体部など、破片が少量出土している。これらのうち、杯身は歪みのあるものが2点、生焼けの細片が1点あり、杯蓋では歪みのあるもの1点、細片が2点ある。225・226はII-4段階の杯身、杯蓋である。225は約1/3個体残存し、226は約1/2個体弱残存する。

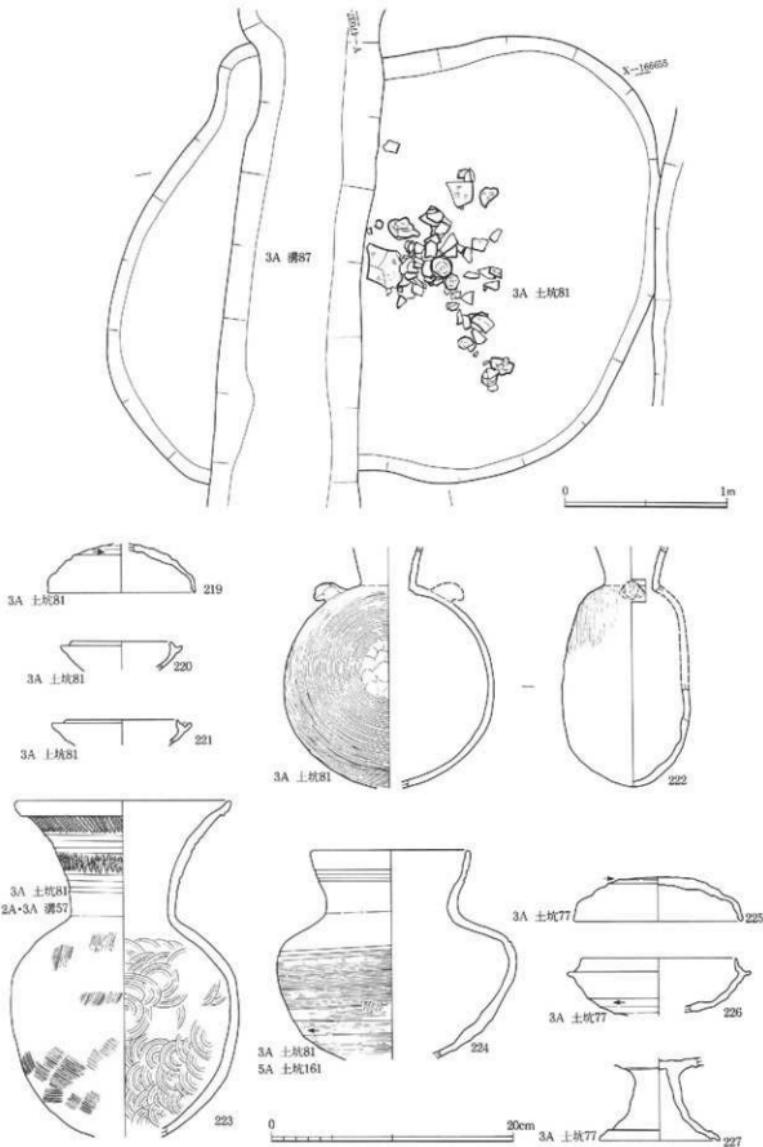


図32 土坑81平面図および3Aトレンチ坑出土遺物

土坑76（図33）は3Aトレンチの建物20と23の間付近に位置し、そこからは中国白磁碗の中世遺物に混じって、II-2の杯蓋細片1点と、229の壺蓋が1/10個体で1点、塙が1点出土している。

土坑161（図33、写真図版60）は5Aトレンチで検出。遺物はII-1の杯蓋が1点、II-2の杯蓋細片3点、II-3～4の杯身が4点、杯蓋が4点、提瓶か不明が1点、杯か蓋か不明のものと甕体部片が少し出土している。II-4の杯身（230）はほぼ完形で、底部外面には、「-」のヘラ記号がある。

土坑42（図33）は2Aトレンチで検出。遺物はII-4の杯身が1点、杯身受け部細片3点（生焼け1点含む）、杯か蓋か不明細片1点、瓶口縁部細片1点、土師器細片1点、II型式の高杯蓋細片2点（231、232）が出土している。

土坑158（図33、写真図版12）は2Bトレンチで検出。遺物はI-5の杯身細片1点、杯蓋2点（ほぼ完形1点、細片1点）、甕口縁部片1点、II-1の杯身が2点（生焼け1点含む）、杯蓋が5点（歪みのある完形1点、1/8個体が1点、生焼けが1点）、甕頭部細片が2点、II-2の杯蓋が1/5個体で1点、II-1～2の杯身1/10個体が1点（233）、杯蓋が2点（細片1点、生焼け1点含む）、その他、杯か蓋不明や甕体部破片が少々出土している。233の杯身は口縁部に歪みが少し見られ、受け部には口縁部の溶着痕が残る。

土坑107（図33）は2Bトレンチで検出。遺物はI-5の高杯脚1点、II-1の杯蓋細片1点、II-2の杯身2点（234）、杯蓋4点（細片2点）、II型式と思われる甕口縁部細片1点など須恵器破片が少しと、土師器の不明細片1点が出土している。234は1/5個体の残存である。

土坑98は2Bトレンチで検出。遺物はI-5の無蓋高杯細片が1点、II-2の杯蓋稜部細片が1点、II-1～2の杯身が1/8個体で1点（235）、II-6と思われる平瓶の口縁部1/4周残存が1点、時期不明の杯か蓋不明のもの少々、壺か甕の頭部破片が1点みられる。

土坑103（図33、写真図版9）は2Bトレンチで検出。遺物はI-5からII-1段階の有蓋高杯1点（237）、無蓋高杯1点（236）、II-1の杯蓋細片1点、II-1～2の杯蓋細片1点、高杯蓋1点、無蓋高杯1点（生焼け）、無蓋高杯脚部1点、鉢か不明1点（生焼け）、II-2～3の杯身細片1点、提瓶細片1点、II-3～4の杯身2点、II-2～4の短頸壺細片と思われるもの1点、II型式の蓋や杯などの細片が少々、壺や甕の体部片少々、高杯脚部か不明1点、土師器の不明細片が1点出土している。236の無蓋高杯は長方形状の透かしが3方に穿たれ、杯部底にカキ目が施され、口縁部に歪みが大きく、3/5個体残存する。237の有蓋高杯は脚が短く、透かしのないもので、受け部には蓋の口縁端部が溶着している。237の残存状態は約3/5個体で、外面に灰を被っている。

土坑248（図33、写真図版60）は2Bトレンチで検出。遺物はI-3～4の杯身、杯蓋が数点と、I-5の杯身、II-1の杯蓋数点、II-1～2段階の杯身1点（238）、他（239）が出土している。239は内傾する口縁部寄り外面に1条の凸帯を張り巡らせ、体部は丸くふくらむ。体部最大径部分に貼り付けによる中空の把手の痕跡が1箇所みられる。把手貼り付け部分にはヘラ記号か不明だが、Y字状の刻線がある。色調は灰色ないし灰白色を呈し、器種は不明であるが、初期須恵器の可能性がある。

土坑246（図33、写真図版60）は2Bトレンチで検出。出土遺物の短頸壺（240）はほぼ完形で、底部内面に当て具痕がみられる。II-2～4段階のものと思われる。この他、II-2～4段階の杯蓋3点、II-5段階の杯身1点、II-5～6段階の高杯脚部破片1点、甕などの体部破片、III～IV型式の壺肩部1点、IV-2段階かと思われる皿の高台1点、土師器細片1点などが出土している。

土坑243（図33、写真図版60）は2Bトレンチで検出。遺物はI-5からII-1の高杯蓋が3/5個体で

1点（241）出土しており、外面には灰を被っている。

土坑162（図33）は2Bトレンチで検出。遺物はI-5からII-1の有蓋高杯1点（243）、II-1の杯蓋2点（242）（生焼け1点）、II-1かと思われる甕口縁部細片1点（生焼け）、II-2杯蓋1点、無蓋高杯1点、II型式の杯か蓋か不明2点、時期不明の甕体部破片が2個体分（生焼け1個体）みられる。このうち、杯か蓋か不明の1点に、「-」のヘラ記号がある。242の杯蓋は3/5個体残存する。243の有蓋高杯は透かしの無い短い脚部で、口縁の立ち上がりの段は退化して沈線状をなす。243は3/5個体残存し、脚部内面には当て具痕がみられる。

土坑112（図33、写真図版60）は2Bトレンチで検出。遺物はI-3の杯蓋1点、I-3～4杯身2点、甕1点（244）、I-4～5の杯蓋細片1点、I-5の杯身6点（細片5点含む）、高杯脚部1点（生焼け）、II-1の杯蓋細片2点、II-2の杯蓋7点（細片3点）、無蓋高杯2点（245）（杯部内面当て具痕1点）、II-2～3の杯身1点、時期不明の有蓋壺頸部1点、甕口縁部1点、杯か蓋不明少々、壺や甕の体部破片少々が出土している。244の甕口縁部破片は1/4周残存し、頸部に波状文2帯（3.1cm幅に19条1帯）とその間に沈線を2条有する。245の無蓋高杯は長脚1段透かしで、3/5個体残存し、体部には沈線1条と波状文1帯（0.5cm幅に6条1帯）が施され、透かしは4方向に穿たれている。245は口縁部にかなりの歪みがみられる。

土坑120（図33、写真図版106）は2Bトレンチで検出。遺物はII-2の杯蓋が1点（246）出土しており、この口縁端部外面にはほぼ縱方向のハケ目による調整痕がある。

土坑177（図33、写真図版13・60）は2Bトレンチ北寄りで検出された。長軸約1.7m、短軸約0.9m、深さ約11cmを測り、埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物にはI-5～II-1段階の杯身3点、II-1段階の杯蓋4/5個体が1点（247）、II-1～2段階の杯身完形品（248）が1点、II-2段階の杯身2/3個体と歪みのあるもの各1点、杯蓋4点、無蓋高杯2点（杯部完形で歪みがあるもの1点）、甕口縁破片1点、瓶1点（249）、土師器杯1点などがみられる。249の瓶は土坑97出土の破片と接合した。その他、サヌカイトの石鎌1点（図11-16）が出土している。

土坑97（図34、写真図版12・61・105）は2Bトレンチ中央部溝19と溝101の先端部分において検出された。長軸約3.0m、短軸約2.3mを測り、方形に近い平面をとる。深さ約7cmを測り、遺物は南東方向に集中して検出され、杯身、杯蓋が目立つ。遺物出土量は口縁部で約180点と多く、その大部分はII-2～4段階に属するが、I-4ないし5からII-1段階の杯身、杯蓋を少々含む。器種は杯身・杯蓋（250～263）以外に、無蓋高杯（264・265）、すり鉢（266）、器台（267）、瓶、壺の破片がみられる。土師器では1点だけ、甕の破片がある。また、III～IV段階の須恵器も少量出土しているが、混入か。251の杯蓋は天井部内面に当て具痕を留める。252の杯蓋、263の杯身は外面に「-」状のヘラ記号を有する。266のすり鉢体部外面には一部欠損したヘラ記号がみられる（写真図版105）。267の器台脚部は少し歪みがみられるもので、約15m西へ離れた溝1出土破片と接合した。

土坑105（図35、写真図版12・62）は2Bトレンチで検出。長軸4.0m、短軸2.9m、深さ0.3mのすり鉢状を呈した土坑であり、埋土は下層に灰黄褐色砂質土に炭化物が混じり、上層ににぶい黄橙色砂質土がみられる。埋没時期はII-4の段階であろう。出土遺物には完形に近い須恵器杯身（269）、3/5個体の杯蓋（268）など、完形に近い杯身、杯蓋や、細片の蓋杯、甕の体部破片など、I-5からII-4段階に属すると思われる須恵器が多量にまとめて出土している。その中でもII-1～2段階の須恵器が最も多い。出土遺物の内訳を口縁部残存の個体数でみると、杯身や杯蓋が須恵器の全個体数153点中、

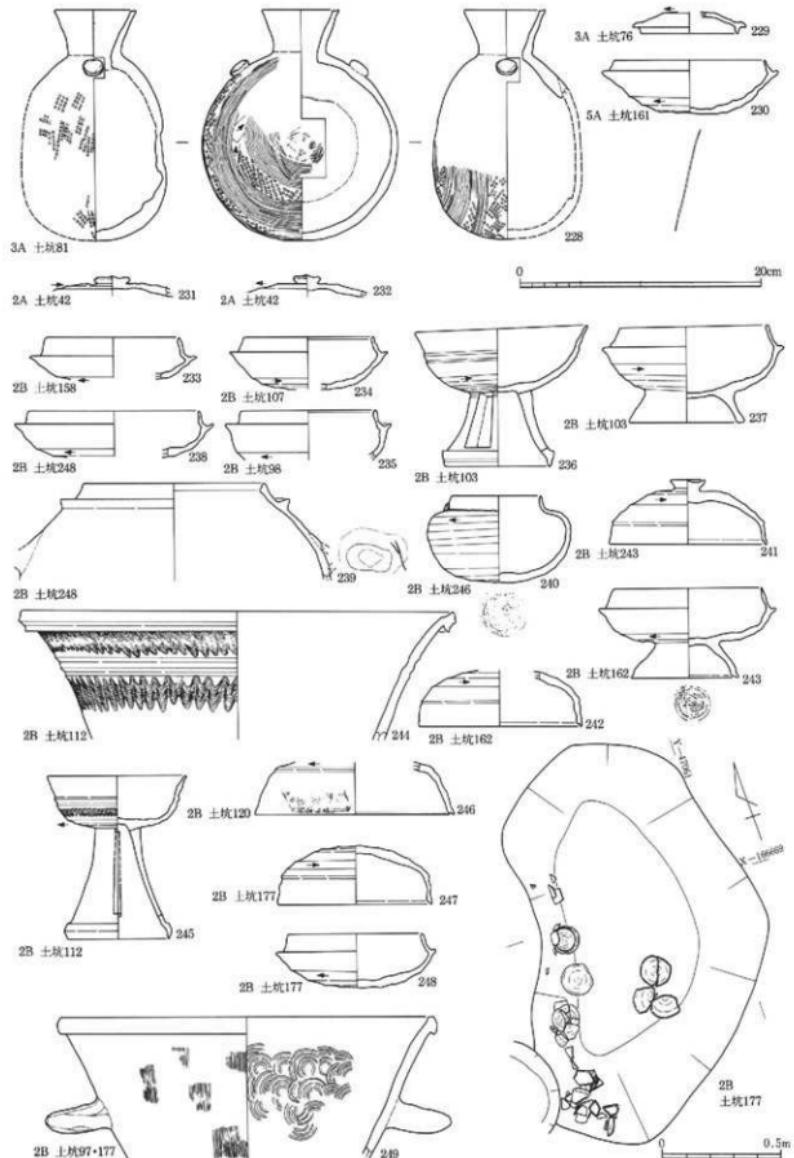


図33 土坑177平面図および3A,5A,2A,2Bトレンチ土坑出土遺物

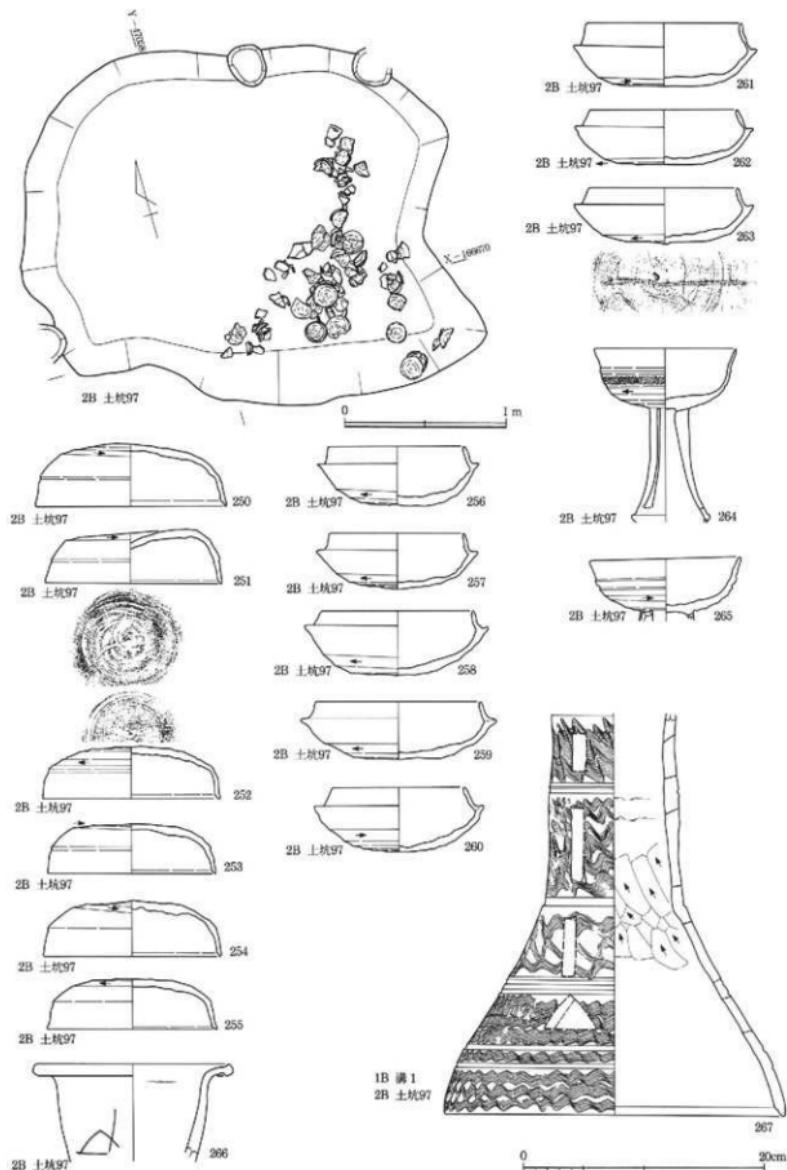


図34 土坑97平面図および出土遺物

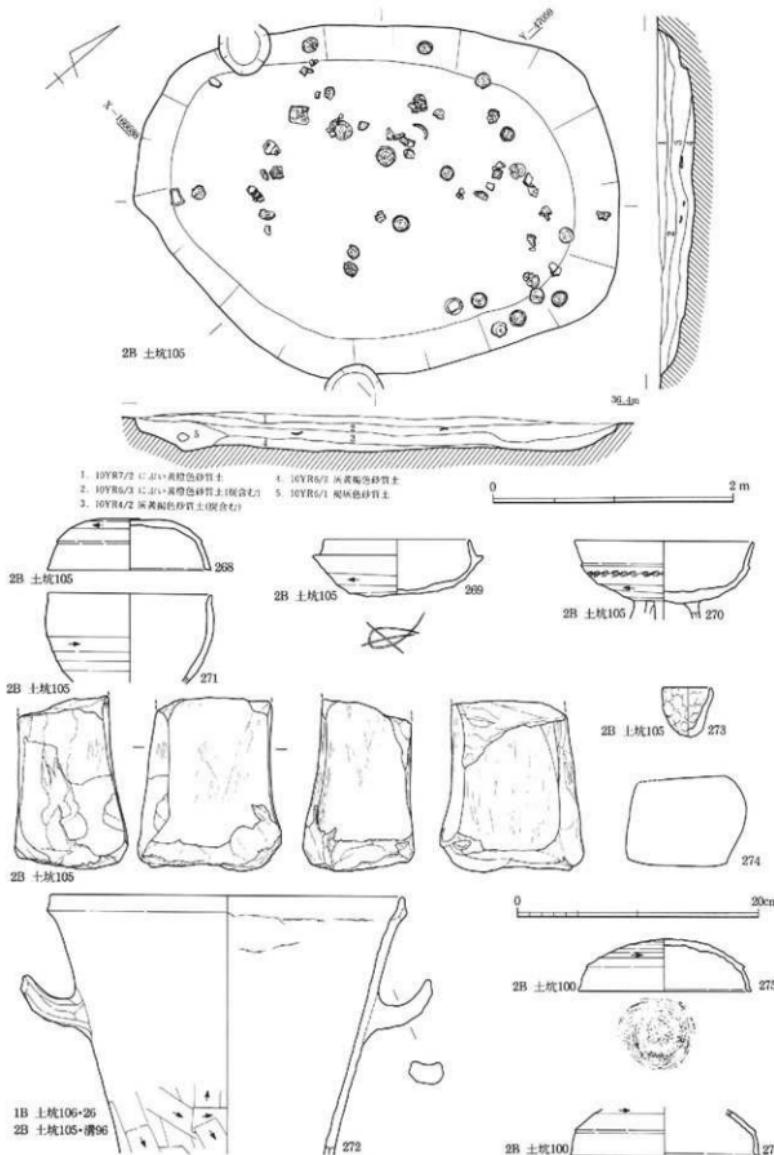


図35 土坑105平・断面図および2Bトレンチ土坑出土遺物

125点で82%を占める。杯身は立ち上がりから受け部まで残存するもの、杯蓋は口縁部から稜部まで残存するものをそれぞれ1点として数えた。蓋杯以外には無蓋高杯（270）、榠（271）、瓶（272）、てづくねミニチュア土器が3/5個体で1点（273）、鉢かと思われるもの、甕、高杯脚部破片などがみられる。272の榠は土坑26と溝96の破片が接合し、1/5個体残存するもので、土坑106出土の榠と同一個体と思われるものである。土師器は甕口縁部細片2点を含め、極少量みられた。南西側からは砥石が1点（274）出土している。274は1端が欠損しているが、もう一方の端は形を整えたようなノミ？で削ったような痕跡を留める。4面は研ぎ面として使用しており、3面は中央が窪む程使い込んでいる。

土坑100（図35）は2Bトレチで検出。遺物はII-1の杯蓋1/2個体弱が1点（275）、II-2の杯蓋1/10個体が1点（276）、II-3～4の杯蓋細片が1点（生焼け）、杯か蓋不明細片3点、土師器不明細片が1点出土している。275の杯蓋は歪みがみられ、内面には当て具痕が明瞭に残存する。

土坑164（図78、写真図版31）は2Bトレチ北西の溝19の西側に殆ど接するばかりの位置にある。出土遺物はI-5～II-2段階の須恵器が少量あり、杯身、杯蓋、高杯、甕体部、瓶、鉢？などが出土している。他には844の土師器の榠破片かと思われるものが1点出土している。外面は縦ハケ、内面は口縁部を横ハケした後、外・内ともになでている。

土坑64（図36）は1B・2Bトレチで検出。ここからはII-3～4段階の杯身1/3個体が1点（277）だけ出土しており、外面には灰を被っている。

土坑6（図36、写真図版11・62）は1Bトレチ東側中央部で検出されており、一辺2.0～2.5mの三角形を呈し、深さは約10cmと浅い。遺物はII-2段階の杯蓋4点（278、279）、脚、II型式の杯か蓋不明、甕体部破片などが少量出土している。278は完形で、外面に灰を被っている。279はほぼ完形に近いもので、焼成はやや不良である。

土坑18（図36、写真図版11）は1Bトレチ北側中央部で検出された土坑である。長辺0.9m、短辺0.6mを測り、深さ約4cmと浅い。西辺にやや窪みを持つ平面を呈する。埋土は多量の炭化物を含んでおり、土坑の東肩部には須恵器が出土している。遺物はII-4段階の口縁端部を欠損した甕が1点（280）出土した。その他、須恵器のII型式と思われる壺蓋、壺・甕体部破片など数点と、土師器細片1点がある。

土坑58（図36）は1Bトレチで検出。遺物はII-1～2段階の須恵器の杯身、杯蓋、脚や時期不明の甕体部破片などが少量出土している。281はII-2段階の杯蓋口縁部破片である。

土坑55（図36）は1Bトレチで検出。遺物はII-3～4段階の杯蓋（282）が出土している。天井部内面は一定方向のナデである。この他、内面に灰を被った、II型式の杯か蓋か無蓋高杯部破片か不明のものが1点ある。

土坑57（図36）は1Bトレチで検出。遺物はII-2～4段階の須恵器が少々と、土師器甕体部片が1点出土している。須恵器の内訳はII-2の杯蓋が5点（288～290）、II-2かと思われる杯蓋口縁破片2点（291、292）、II-3～4の杯身が2点、II型式の杯か蓋不明の破片数点、甕口縁部破片2点（293、294）、甕体部破片1点などである。杯蓋口縁端部外面には、ハケ状のもので縦方向になでたような痕跡を留めるものが2点（291、292）ある。このような痕跡は数少ないが、大庭寺遺跡では数点認められた（写真図版106）。

土坑19（図36、写真図版62）は1Bトレチで検出。遺物はI-4～5からII-5段階の須恵器が数点出土している。内訳はI-4～5の生焼けの杯身1点（286）、II-2の杯蓋1点（284）、II-3～4

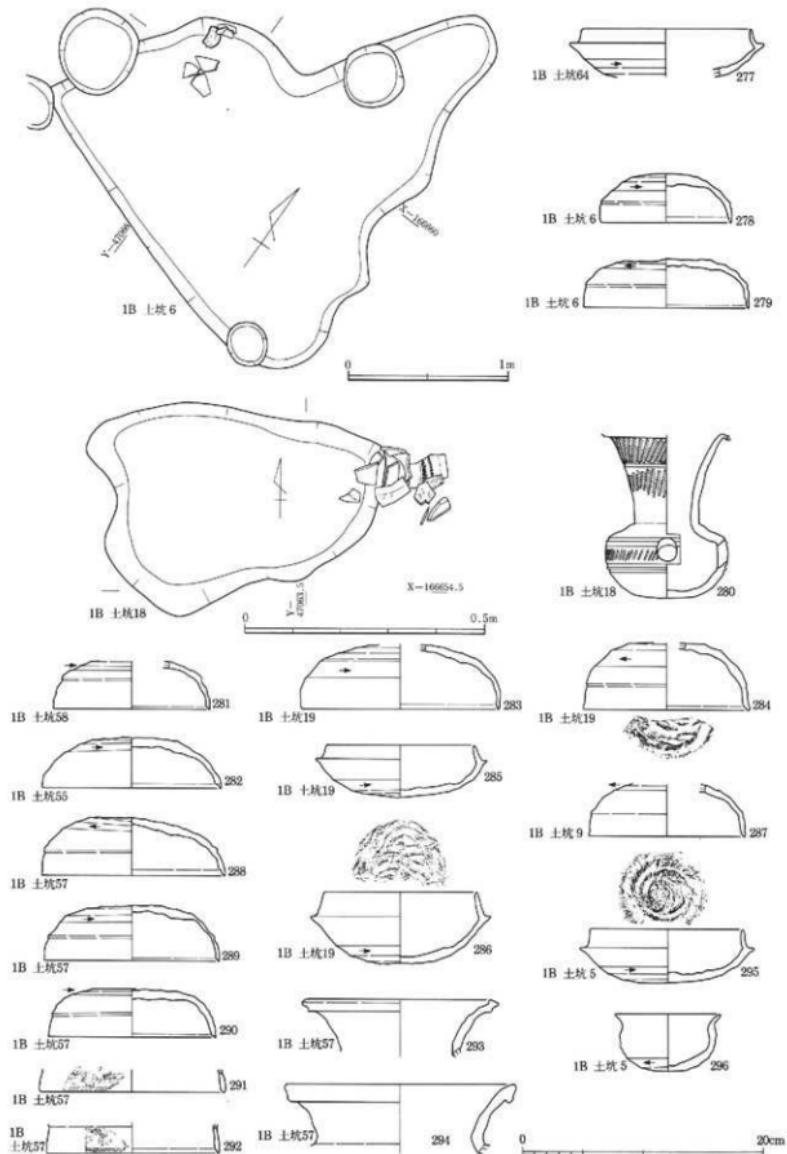


図36 土坑 6, 18平面図および1B, 2B トレンチ土坑出土遺物

の外面に灰を被った杯蓋 1 点（283）、完形の杯身 1 点（285）、壺体部細片 1 点である。杯身内面（286）と杯蓋内面（284）および土坑 5 出土の杯身（295）には當て具痕がみられる。

土坑 9（図36）は 1B・3B トレンチで検出。遺物は II-1～2 から II-5～6 段階の須恵器が少々と、土師器壺口縁部 1 点が出土している。内訳は II-1～2 杯身 1 点、II-4 かと思われる生焼け壺口縁部 1 点、脚 1 点、II-5～6 の杯身 1 点、蓋杯などの破片、壺体部破片などである。287 は II-1～2 段階の杯蓋である。

土坑 5（図36、写真図版62）は 1B トレンチで検出。遺物は II-1～4 段階の須恵器が少々と、土師器細片が僅かに出土している。須恵器は杯身、杯蓋の破片の割合が高く、他には壺口縁部、脚部破片、瓶口縁部などが僅かにある。295 は II-2 段階の杯身、296 は II-2～3 段階かと思われる小形鉢である。

土坑 8（図37、写真図版11・62）は 1B トレンチ西隅で検出された。深さ約 2 cm の浅い土坑であり西側は溝 2 によって切られている。遺物は中央部に集中して出土しており、主に須恵器壺の小片が薄く揃がっている。出土遺物には 299～301 のような II-4～5 段階の須恵器の杯身 4 点、壺 1 点などがみられる。300 の杯身は杯蓋の口縁端部が溶着して残っている。301 の壺は頸部に列点文を 2 帯一対と沈線 1 条を 2 回施し、頸部下方はカキ目を施している。その他、II-2 段階の杯蓋が 1 点と、II 型式の脚部細片 1 点、杯や蓋の細片などが少々ある。

土坑 61（図37、写真図版11）は 1B トレンチ南端において検出されており、深さ約 10 cm と深い。埋土は褐灰色砂質土である。出土遺物は土師器の壺（297）、II-1～2 段階の内面に當て具痕を残す須恵器杯身（298）の他、II-2～4 段階の生焼け 1 点を含む杯蓋破片が各 1 点などみられる。

土坑 20（図38、写真図版63）は 1B トレンチで検出。遺物は I-5～II-2 段階の須恵器（302～304）が少々出土している。内訳は杯蓋（302）15 点、杯身（303、304）10 点、蓋のつまみ 1 点、壺 4 点、生焼けの壺？ 1 点、脚破片 1 点、横瓶？ の体部片などである。

土坑 29（図38）は 1B トレンチで検出。遺物は I-5～II-4 段階の須恵器が少々と、土師器の細片が 1 点出土している。内訳は略完形の 1 点と生焼けの完形 1 点を含む杯蓋 6 点、生焼け 1 点を含む杯身 5 点、無蓋高杯細片 1 点、壺 1 点などである。305 は I-5～II-1 段階の杯身である。

土坑 27（図38、写真図版62）は 1B トレンチで検出。遺物は「-」のヘラ記号のついた I-3 段階の杯身が 1 点、II-2 段階の杯身細片 1 点、杯蓋細片 1 点、II-3～4 段階の口縁部に焼き歪みのある杯身 1 点（306）、短頸壺（307）1 点、内面に灰を被った II-4～5 の杯身細片 1 点、生焼けの中型壺底部 1 点などが出土している。

土坑 63（図38、写真図版63）は 1B トレンチで検出。遺物は I-5～II-1 段階から II-3～4 段階の須恵器が少々出土している。内訳は I-5～II-1 段階が杯身 2 点、杯蓋 3 点、II-2～3 段階が杯身 3 点、杯蓋 7 点、壺 2 点、II-3～4 段階が杯身 3 点、杯蓋 1 点で、そのほか脚や体部などの破片がある。そのほか、1 点だけだが、III-3 段階と思われる脚台破片がある。308 の杯蓋には天井部外面にハケ状のものが触れた痕跡と、3 本の平行線のヘラ記号状のものがみられる。310 の杯身は杯蓋口縁端部が溶着している。308～310 は II-2～3 段階にあたる。

土坑 60（図38）は 1B トレンチで検出。遺物は杯身 3 点、生焼けの壺 1 点などの II-2 段階の須恵器が出土している。311 の杯身は 1/4 個体残存し、底部外面には布目压痕が認められた。

土坑 56（図38）は 1B トレンチで検出。遺物は II-1 から II-2～3 段階の須恵器が数点出土してい

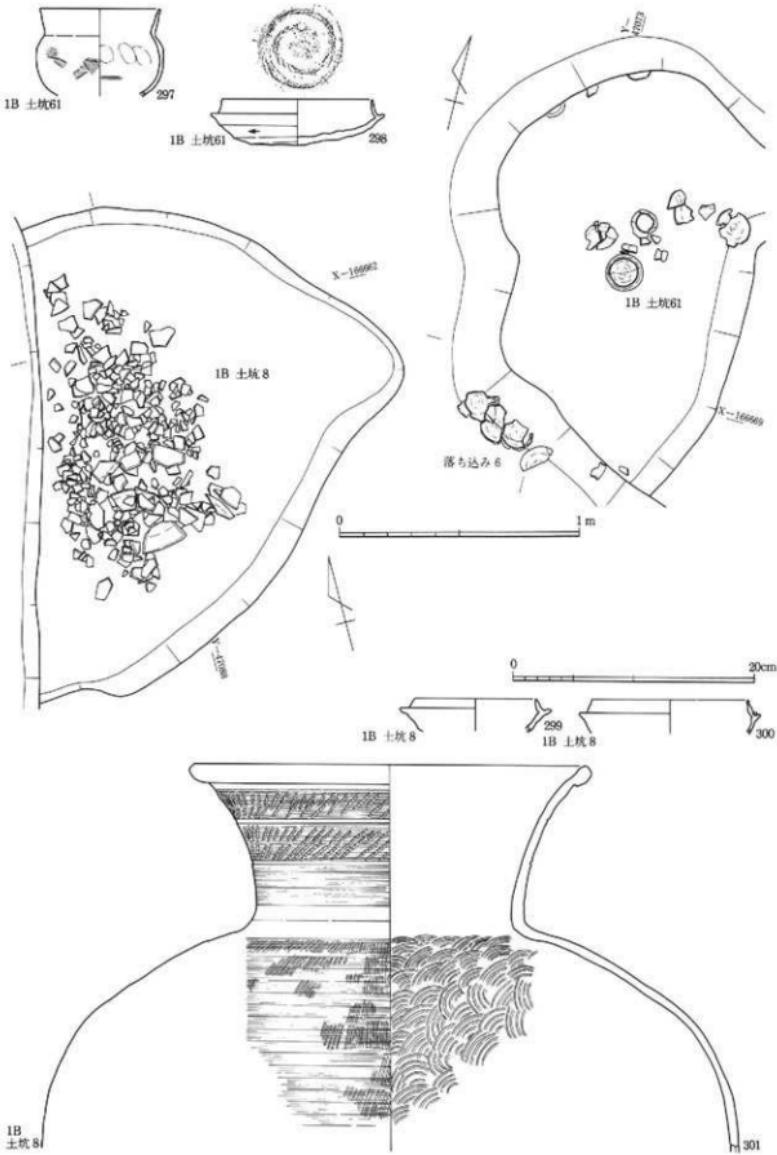


図37 土坑61, 8 平面図および出土遺物